549-293
1200501507419
549
293
×
複写

261025

鎌倉と江の島

帝國圖書館藏

昭和三年 内務省 帝圖

日本名勝研究會編

293
549-~~267~~

『名勝研究』刊行趣旨

國民の趣味の如何によつて其國の文野を卜するに足る、と或る西人は喝破しました。誠に至言であると思ひます。動物や野蠻人の間には色食の慾の外には何等趣味と名づくるほどのものはありません。趣味はたゞ開明の人間のみが有する特權であります。多くの趣味のうちに於て、讀書趣味と旅行趣味とは最も高尚有益のものとされて居ります。一は書籍を通じて智識を向上せしめ、一は見聞によつて知見を磨くのであつて、兩者共に文明の進歩に正比例して普及の趨勢にあるところの、至上の趣味であります。私は生來極めて、旅行に趣味を有して居りますので、曾て旅行會を組織して同好者と共に此の趣味慾の滿足を計つたことがあります。當時私の最も遺憾に感じたことは、適當なる指針の缺乏でありました。所謂案内書なるものは汗牛充棟も啻ならぬほどにありますけれども、何れも低級淺薄のものであつて、智識階級者の手引にす

るに足りるものは絶無であります。私は團體の先達たる責任上から、諸書を渉獵して自ら適當なりと信ずる指針を作製して責任を果したのでありましたが、その調査書類が私の狹い書齋に積んで山を爲してゐる次第であります。此頃同好の先輩知友諸氏が切に此の調査の結果を刊行して。同好の士に頒たんことを慫慂しますので、私も此の試みが多少にても同好者の手引となると共に、更らに旅行趣味の普及を圖る一助ともなれば幸甚でありますから、斷然意を決して、日本名勝研究會なるものを組織し茲に「名勝研究」を刊行する事にした譯であります

著者識

目次

鎌倉と江の島……一
鶴岡八幡宮……四
赤橋……八
若宮大路……九
光明寺……一一
妙本寺……一二
安國論寺……一三
寶戒寺……一三
德宗神社……一五
筋替橋……一五
大倉幕府址……一五
勝長壽院址……一七
荏柄天神社……一九
杉本觀音堂……二〇
報國寺……二一
淨妙寺……二一
公方屋敷地……二二
葛西谷……二四
滑川……二五
覺園寺……二六
鎌倉宮……二七
瑞泉寺……二九

一覽亭址……三〇
巨福路坂……三二
建長寺……三二
半僧坊……三五
長壽寺……三五
明月院……三六
東慶寺……三七
淨智寺……三九
圓覺寺……四〇
龜谷坂……四二
扇　谷……四二
化粧坂……四四
葛原岡神社……四四
景清大宰……四五
海藏寺……四六
英勝寺……四七
壽福寺……四八
御用邸……五〇
由比ヶ濱……五〇
長谷觀音……五三
光則寺……五三
大　佛……五四
鎌倉御靈社……五六
星月夜井……五七

極樂寺坂……五八
極樂寺……五八
日蓮袈裟掛松……六〇
稻村崎……六一
靈山崎……六三
七里濱……六三
腰　越……六四
滿願寺……六六
片　瀨……六七
片瀨川……六七
辰の口……六八
龍口寺……六九
江ノ島……六九
光觸寺……七四

旅杖の痕

海道記＝源光行……七五
回國雜記＝准后道興……八一
丙辰紀行＝林道信……八三
熱海紀行＝横井也有……八四
東關紀行＝源親行……八六
東關紀行＝宗　牧……九〇
東遊記＝橘南谿……九四

鎌倉と江の島

鎌倉は治承四年源頼朝幕府を此處に開いて、東國を制度したのに始まり、北條氏を經て足利氏に至るまで凡そ二百年間、武家の總帥として海内に號令し、遂に京鎌倉と並び稱せられるに至つた。足利幕府は鎌倉にその子弟を置いて之を管領と稱し東國を治めしめたが、寶德四年管領成氏古河に移つてからは、鎌倉は關東政都の地位を喪ふたのである。即ち鎌倉は風光を主とする名勝地といふよりも、歴史的懐古に低徊すべき舊跡であり、菜圃桑園一木一草と雖も昔を語らざるはない。地は相模の東南隅にあつ

て峰巒屏風の如く東西北の三面を擁し、極樂寺、大佛、化粧坂、龜ヶ谷、小袋坂、朝夷、名越の七切通によつて四隣の都邑に通じ、南の一方由比ヶ濱を以て相模灣の海波に蕩み、風光明媚、東京を距る約三十哩、汽車一時間半、極めて便宜の地にあるので都人の遊覽又は別莊地として近來非常な發達を遂げてゐる。

新編風土紀――鎌倉郡、陸田多く水田少し、用水には專ら戸部川の水を引沃ぎ、馳川、砂押川、境川等の諸流なも灌漑す、ふれど三分の二は山間の涌泉を引き、溜井を構へ、天水を仰で耕植せり、故に旱損の患多し、土性は砂礫錯れる地多く、眞土是に次ぐ、野土糯米土は少し、農間の餘資、海邊の村々は專漁釣をなして江戸に運送し、鶴岡、江島等の道側に連店せる家は、參詣の遊客に酒食及び諸物を鬻ぎ、東海道係る處は往來の旅客を休泊し、其他は採薪等を業とす。富饒の戸口は稀なり。

海道記――此所の景趣は海あり山あり、水木たより有り、廣きにもあらず、狹きにもあらず、街衢のちまたは方々に通ぜり、實に此聚をなし、邨をなす、鄕里郊を論じて、望みまづめづらしく、豪を擇み賢を選む、門栁しきみを並べて、地又賑へり、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟機の津、商賈の商人百族賑はひ、東西北の三方は、高卑の山屏の如くに立廻りて所を餝れり……

東鑑――正承四年九月、盛長（安達藤九郎盛長）自千葉歸參申云、當時御居所、非指要害地、又非御蟻跡、速可令出相模國鎌倉給、常胤相率門客等、爲御迫可參向之由申也……十月六日、著御于相模國、畠山次郎重忠爲先陣、千葉介常胤候御後、凡扈從軍士不知幾千萬、楚忽之間、未及營作沙汰、以民屋被定御宿館。

鎌倉

南郭

維昔弈鯨曝海崎、君王高枕付戎衣、中原寶鼎無輕重、御府彤弓有是非、一自黎民歸將略、遂令赤子弄兵機、鎌倉不必山河固、試上兵墟對落暉。

湖山

同

心計雖私亦有功、空山何處見遺風、將軍祠宇荒烟裡、管領衙門古圃中、恩及蒼生在勸儉、智欺一世定英雄、思量此際堪稱快、梟首胡奴杜世忠。

南郭

送人遊相中

覊跡山川經略勞、鎌倉客路自蓬蒿、將門三世荒臺月、戎馬千年大海濤、劒氣偏隨星井沒、笙聲空過鶴陵高、壯遊知爾因懷古、慷慨談兵攬佩刀。

加茂眞淵

○

鎌倉のよるの山おろし寒ければみなのせ川に千鳥なくなり

鎌倉右大臣

○

宮柱ふとしき立てゝよろづ代に今ぞさかえむ鎌倉の里

○目に青葉山郭公はつ松魚　素堂

○その昔鎌倉の海や鰹やなき　蕪村

鶴岡八幡宮

一に鎌倉八幡宮とも言ふ、停車場前の大道若宮大路を北に進むこと五丁にして達する。祭神は應神天皇、神功后皇、大仲媛神三座であつて、初め康平六年に源頼義、由比の郷字鶴ヶ岡に勸請し、治承四年源頼朝之を大臣山の麓、松ヶ岡に移し、社名は舊稱を襲ふて鶴ヶ岡八幡宮と呼んだのである。その後建久二年に火災に罹つたので、同四年頼朝更に背後の山腹に新殿を營み、別に八幡宮を勸請し、下の宮には仁德天皇を奉祀して若宮と稱へた。現在の新殿は德川十一代將軍家齊の改築にかゝり、樓門、本殿、廻廊共に壯嚴を極め輪奐の美を盡したが、惜しいかな大正十二年の大震災に潰れて、未だ再築されてゐない。賽路は遠く由比ヶ濱から眞一文字に通じ、途中一の華表、二の華表があり、赤橋を渡つて行くこと數十歩にして神樂殿がある。此の處で新田義貞が、北條高時の首を實檢したといはれてゐる。古へ源義經の妾靜が頼朝の命に由つて今樣の舞樂を奏したのは卽ち此の社殿である。鼓は祐經、銅柏子は重忠、

吉野山峰のしら雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞこひしき

賤やしづしづの苧卷くりかへし昔を今になすよしもがな

義經の跡を慕ひ、兄弟の確執を憂慮する、情意を盡した靜の妙技は、鬼をも取挫ぐべき坂東武者を感動せしめて、滿座上下皆袖を絞つたと傳へられてゐる。此廟は鎌倉幕府の崇敬して、武家の守護神とした者であるから、歷代將士の歸仰篤く、山城の男山八幡宮と東西相對した武神である。維新の際、六角堂、愛染堂、藥師堂、大塔、鐘樓、輪藏、護摩堂、二王門、辨天堂などが撤去せられた。舞殿及樓門は大正の大震災に潰れた。本殿は改築中である、本社の東隣に白旗宮がある。元と本社の西隣にあつた頼

朝社を茲に遷して公の靈を祀つたものであつて、社殿は明治十一年の新築である。豐臣秀吉が當社に參詣し「共に天下を語るものは君と吾とのみ」と破顔して其肩を撫したといふ賴朝の像は今も此處に安置してある。正面石階の左側に銀杏の大樹がある。隱れ銀杏と呼ばれ、承久の昔鶴岡の別當公曉が、右大臣實朝を刺し其首級を取つて逃げたのは此處である。石階を上り盡すと正面に樓門あり、良恕法親王の親筆「八幡宮」三字の額が揭げてある。樓門の左右が廻廊になつてゐて、中に拜殿本殿を圍んでゐる。本社には收藏の寶器極めて多く、就中刀劍を以て第一とする。源氏、小田原北條氏、德川氏歷代奉獻の名品である。其他武具、男女の手道具、樂器舞具、經像法具、圖書の類等數百件に上るであらう。

○

年經たる鶴ヶ岡邊の柳原あをみにけりな春のしるしに　平泰時

○

鶴ヶ岡木高き松を吹風の雲井にひゞく萬代の聲　平基氏

鶴岡

鴨脚霜凋古廟秋、荒墳幾處葬公侯、遺基今日蓬蒿合、雄略當年魑魅愁、寶鼎潛移歸細柳、乾坤一革割鴻溝、可憐猜忌相屠戮、覇業銷沈付逝流。　安積艮齋

同

透千度小路、謁鶴岡八幡宮、高門飛橋、廻廊曲檻、彫玉鏤金、巍然不滅其昔、階除有不蹈之石、石之龜齡、凡眼不得視之、千度壇連七里濱、崢嶸華表奪龍鱗、廻廊六十間靈地、風不鳴條宗廟神。　僧萬里

新編相模國志——鶴岡とは元由比濱の八幡宮の舊地名なり、東鑑「治承四年十月、前武營着御于相模國、先奉遙拜鶴岡八幡宮」とあるは、其由比濱に在りし時なり、「同月十二日、爲崇祖宗、點小林鄉之北山、構宮廟、被奉遷鶴岡宮於此所、以專光坊暫爲別當、令大庭景義執行宮寺事、此間潔齋、當宮御在所、本所兩所取捨、賢慮猶危給之間、任神鑑、於寶前自今取圖給、治定當砌、然而未及花構之飾、先作第茨之營、本社者後冷泉院御守、伊豫守源朝臣賴義、奉勅定、征伐安倍貞任之時、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潛勸請石清水、建瑞籬於當國由比鄉、永保元年二月、陸奥守同朝臣義家、相修覆、今又奉遷少林鄉、改蘋繁典禮」

新編風土記——今の鶴岡下宮の地には、治承四年まで稻荷(松岡明神と號す)社ありしを、北方丸山に移し、其跡に宮祠を建て、八幡を勸請し、是をも鶴岡八幡宮と稱す、是より社地を都て鶴岡と唱へ、松岡の名は稱せざりしにや、東鑑に所見なし、世下りて永德應永の頃、又松ヶ岡の名著見し、松ヶ岡八幡宮別當職輔任、永

享年間の物にも見えたり、其後は湮滅して所見なし

北國紀行（堯慧）――鶴岡へ參りお、靈木長松連りて森々たるに、玉を磨ける社頭のたゝずまひ、由比濱の鳥居遙に霞渡りて、誠に妙なり、吹殘す春の霞も沖津洲に立てるや鶴ケ岡の松風……

湘中紀行――謁鶴岡祠、自鎌倉衰廢、唯此巋然、殿堂門廡、弘敞壯麗、樹林蓊鬱、階除端肅人人莫不竦禮、觀其結構、華表南向、內繫放魚池、池上當路有石橋、穹隆如虹、呼曰赤橋、直北爲山門、立金剛力士二像、署曰鶴岡山、山門東建多寶塔、塔東爲鐘樓、山門內爲舞殿、東爲少宮、是仁德帝廟也、舞殿北石階丈餘、階西有銀杏樹、大連抱、傳道、僧公曉殺實朝於此樹下、未知然否、階上平地、建樓門、署曰八幡宮寺、左右連廻廊、西廊外建賴朝廟、寘木像焉、號白旗祠、其西石階下、建實朝廟、號柳營祠、此祠宇大略也、外又有佛殿經藏、小祠小堂、不可歷舉。

東關記行――鎌倉始を申せば、故右大將家義兵を擧げ、朝敵を靡け、營館をこの所にしめ、佛神をその砌にあがめ奉るよりこのかた、今繁昌の地となれり、中にも鶴岡の若宮は、松栢のみどり愈々しげく、蘋蘩のそなへ缺ることなし、陪徒をさだめて、四季の御かぐら怠らず、職掌に仰て、八月の放生會をおこなはる、崇神のいつくしみ、本社にかはらずと聞ゆ。……

赤橋

鶴岡八幡宮の前、二つの池の間にある橋の名である。赤色に塗つてあるので、此名があるのであらう。北條執權の一族に赤橋を家號としたものもあつた。

若宮大路

鎌倉の停車場を出ると松並木が七八町ばかりも續いた南北の大通りがある、これが八幡前通り、所謂若宮大路で、鎌倉第一の大通りである。此邊から八幡宮附近を雪ノ下と呼ばれてゐる。兩側に民家櫛比し、八幡參詣の客を待つてゐる。中央は左右土砂を以て封じ、通路と相分ち、置石と呼ばれてゐる。故に此地を置石町とも呼び、其土壘をば段葛と稱す。別當和田義盛が執權北條義時と戰つたのは此のあたりである。石の鳥居は寛文八年木製を改めて石材となし、大鳥居から二鳥居まで六町四十五間、三鳥居まで四町十五間。一名を車大路と云ひ、古書には七度小路或は千度小路などゝも書かれてゐる。將軍賴經から守邦親王に至るまで六代の幕府址は、今置石町の民家の背後にあつて、親王屋敷と呼ばれゐてる。

東鑑――自鶴岡社頭、至由比浦、直曲橫而造詣往道、是日來雖爲御素願、自然涉日、而依御憂所御懷孕御祈、故被始此儀也、武衞手自令沙汰之給、仍北條殿以下、各被運土石……」

太平記――濱の手破れて、源氏若宮小路まで攻入たりと騷ぎければ、入道は其子勘解由爲基と極樂寺の切通へ向ひて發す、已にして敵は小町口に至り、父子が勢六百餘人を中に取り籠めて討んとす、父子は二所に打寄りて、之を懸け破り、又追ひ靡け、七八度が程揉んだりける、義貞の勢に懸け散されて、若宮小路に引取りて、人馬に息をぞ繼がせける。……

新編風土記――嘉禎二年三月、此地に幕府新造あるべき日次を定めらる。（東鑑曰、可被新造幕府幷御持佛堂等、於若宮大路東頰事、今日於御所有其定、日次已下、陰陽道勘文、晴賢文元等所令連署也、六月、若宮大路新御所、築地如之、仍可行連日土公祭之由、被仰下）按ずるに東鑑に載せし若宮大路の御所、弘長三年以後の事蹟考ふるに所なし、但守邦親王の時、正和四年三月（鎌倉武將執權記曰、三月八日夜、自濱火出、八幡宮、並將軍御所、相州亭以下燒失畢）、元德元年二月（七日午時、將軍御所燒失）兩度火災に罹れり、元弘三年五月、北條氏滅亡の時、幕府も兵火に罹り（武將執權記曰、五月二十二日、鎌倉方被打落、殿中以下懸火、悉燒掃之、一族等或自害、或落畢）守邦親王は遁れて出家せられしが、八月逝去あり。其後足利尊氏、建武二年の頃、爰に館を構へし事、梅松論に見えたり。

○

荒墟壞道草萎々、將第侯家處々迷、行憶舊開尋遺址、山茶花落古僧栖。

○

屋舗ひとつもたぬ案山子はなかりけり　乙二

菅茶山

光明寺

停車場から十八町、由比濱の東端亂橋材木座にある。淨土宗鎭西派關東十八檀林の隨一で、天照山蓮華院と號す。昔は寺領百石を有してゐた。開山は紀全禪師卽ち法然上人の弟子良忠である。仁治元年北條經時佐介ヶ谷に創建して蓮華寺と號し、寛元元年今の地に徙して天照山光明寺と改めたのである。總門を入りて正面に山門があり、後花園天皇の宸筆天照山三字の額を揭げてゐる。その正面に開山堂があり、紀主禪師の像を安し、堂の側らにある槇、柏の二樹は、禪師手づから栽えたもので、堂々として寺の威嚴を添へてゐる。其他二尊堂、鎭守稻荷社、經藏、鐘樓等は皆境內にある。此寺には寶物曼陀羅繪卷があり。山門は二つとも宏壯である。開山良忠上人は法然の孫、聖光の弟子であつて、然阿とも云ひ、弘安十年當寺に於て入寂した。良忠には六人の弟子があるので寂後六派に分れた。所謂六派中京都の三派は一條禮阿、三條道光、小幡慈心であり、關東の三派は白旗寂慧（光明寺第二世）、名越尊觀（大澤流義の祖）、藤田持阿（藤田流義の祖）以上を六派と云ひ當時は六派の惣本寺であ

る。六派のうち白旗大澤の兩流だけ今尙ほ遺りて、四派は斷絶した。近世は十七箇寺の檀林皆白旗であるから、白旗一流といふべきであらう。

高僧傳――釋祐宗、字觀譽、巡歷東關、習學積勤、任相之光明寺、講經多衆、明應四年、唱道都下、遂入禁宮、講彌陀經、奏說協旨……

妙本寺

停車場の東南五丁、字比企ヶ谷にある、日蓮の門弟日朗上人が開祖で、開基は日學である。文永十一年比企大學三郎、日蓮の俗弟子となつて日學と云ひ、當寺を創建したのである。日蓮が始めて寺院說法をしたのは此寺であると言はれてゐる。寺地は比企判官能員の第趾であつて坪數四千六百三十坪、比企能員の女は賴家將軍の妾となり長狹の局と云ひ、一幡の生母である。賴家薨去の後相續の亂があつて、比企一族は一幡と共に討死したのである。境內に比企一族の墓碑及び一幡の袖塚といふのがある。一幡小御所に防戰したが力盡き館に火を放つて自及した。後遺骸を燼中に求めて僅かに小袖を得たのでそれを此に埋めて弔つたものであるといふ。本尊は釋迦如來である。

安國論寺

妙本寺を出でて大町の市街を南に進み、四辻の處から東に折れて五町ばかりも行つたところが松葉が谷で、此の谷に安國論寺がある。此處は建長五年に日蓮が安房の小湊から移つて小庵を結び立正安國論を草して時賴に上つた所で、今もそれを書いた岩窟が殘つてゐる。寺寶中に日朗上人の紺地金泥の立正安國論一卷がある。

寶戒寺

橫大路の東南端にあつて、其の門前に於て小町大路と相交叉してゐる。寺の背後は滑川に至り、葛西ヶ谷を望む地位にある。此寺は北條義時以後執權の屋敷址であつて、北條氏が一百餘年の間天下の政を執つた所である。元弘三年高時滅亡の後、足利尊氏が後醍醐天皇に奏請して葛西谷の東勝寺を此に移し、寶戒寺と名けて以て前代北條氏の跡を弔つたものである。寶物には高時の畫像等種々あり、「平家の亡魂ども怨を爲る由申に由て、高時が屋敷迹に寶戒寺を建立して、多くの平家の亡

魂を弔ひ、高時を德宗權現と號し、此寺の鎭守に祝給ければ、さてこそさしも靜まりぬ……」と北條五代記に見えてゐる。開基は惠鎭であつて、金龍山釋滿院と號す。惠鎭は慈威和尙と號し、圓觀僧正とも稱し、後伏見帝を始めとして五代帝王の戒師であつたので、五代國師とも稱されてゐる。

○

百年挾生據鎌臺、大盜並存仁義才、後苑宴天狗舞、前庭鬪龍旅葵來、一朝背血沾青艸、九世城池委赤灰、

寶戒寺邊松柏裡、風含鐘磬至今哀。

服部南郭

鎌倉、過北條氏墟

天王寺上槐槍吐、相州府內天狗舞、新郎反旗誅老荒、九世廟社付一炬、錦衣狡葵群鬪處、一犬寥々吠禾黍、

賴杏坪

太平記——元弘三年五月二十二日、安東左衞門入道聖秀、三千餘騎にて稻瀨川へ向ひたりけるが、世良田、山瓦、長濱が勢に取籠られて、百餘騎に討成され、已が舘へ歸りたりけるが、今朝巳刻に、宿所は早燒て其跡もなし、鎌倉殿の御屋形も燒て、入道殿東勝寺へ落させ給ひぬと申者有ければ、いざや人々、とても死せんずる命を、御屋形の燒跡にて、心閑に自害して、鎌倉殿の御恥を雪がんとして、討殘されたる郎等、百餘騎を相從へて、小町口へ打莅む、前々出仕の如く、塔辻にて馬より下、空しき跡を見廻せば、今朝まで奇麗なる大厦高牆の構、忽に灰燼と成て、須臾轉變の煙を殘し……。

天正本太平記——工藤新左衞門入道は、時々諫言を納れしかども、高時入道終に承引なかりしかば、高野山に閉籠り、再び人間に出でじと誓ひたりしが、鎌倉の事共、流石耳に觸、心を動す事多かりしかば、下着して、此彼の燒跡共を見廻て、

ふる里の昔を見ずばもとよりの草の原とや思ひなさまし

德宗神社

寶戒寺の境內にある。德宗權現と云ひ、北條高時を始めとして北條氏諸公の靈を祭つたものである。

北條五代記——平家の亡靈とも怨を爲る由申に因て、高時が屋敷迹に寶戒寺を建立して、多くの平家の亡魂を弔ひ、高時を德宗權現と號し、此寺の鎭守に祝給ければ、さてこそさしも靜まりぬ……。

筋替橋

須地賀江橋とも書く、橫小路から大藏町に到る街角の小流に架した長二間の石橋である、鎌倉十橋の一に數へられ、寶治元年六月、筑後左衞門次郎知定、於筋替橋、討捕若狹前司泰村郎從云々

大倉幕府址

鶴岡八幡宮を出て東に行くと師範學校がある。そこが昔の三浦屋敷の址で、路を隔てた南は畠山屋敷址である。橋を渡つたところが賴朝の屋敷で卽ち

大倉幕府址である。いま雪ノ下の管内で、鶴岡の東（西御門の東南）、荏柄社の西に當つてゐる。尼將軍政子が死んだ後、幕府を小町に移すまで五十餘年間は、百般の政令が此處から出たのである。そこから一二町山の方へ行くと高い丘の半腹に頼朝の墓がある。五輪塔である。

鎌倉懐古

骨肉三朝盡、司晨有牝鷄、荒涼荊棘裡、空見舊時栖、

蘭亭

東鑑――治承四年十二月、新造御亭、有御移徙之儀、去十月、有事始、營作于大倉郷也、時尅自總介廣常之宅、入御新亭寢殿、御供輩參侍所十八間、二行對座、凡出仕之者、三百十一人、

同――御家人、同構宿館、自爾以降、東國皆見其有道、推而爲鎌倉主所、素邊鄙而海人野叟之外、卜居之類少之、正當于此時、閭巷直路、村里授號、加之家屋並甍、門扉輾軒云々。

新編風土記――大倉幕府址（里俗頼朝屋敷）大藏町の北にて、方六町許の地なり、地形を以て其境界を計るに、南は大藏町の街道、西は鶴岡、北は法華堂に邊し、艮の方に荏柄天神社あり、四面に門を設け、其方位を以て之を稱す、門外の地名を東御門、西御門、南御門など唱ふる是なり。抑此地は伊豫守頼義の居蹟たりし事、保曆間記に載す、又陸奥守義家が館を大倉谷に造營せし事、准后親房の記に見ゆ、其後頼朝始めて館を造營し、（治承四年十月）實朝、政子に至るまで、軍政を聽く、嘉祿十一年政子薨じ、幕府は宇津宮辻に徙す、通じて四十七年間なり。

東國紀行（宗牧）――鎌倉の舊跡の旅寢其感有り、けふは三月一日、早朝先、鶴ケ岡八幡宮參詣、松の木のまに櫻盛りにて、石清水臨時の祭、舞人のかざしに、思ひまがへられたり、近年御遷宮、あけの玉垣より始、見るめも耀く春の光、纔に昔おぼえたり、めに近き谷々、右大將家の御跡、山かづも心あるにや、畑にもなさず、芝しげらせ、はなち飼の駒、所え顔なり、する墨、池月、ひやされし流、水さびゐて影もみえず。

ことゝはゞ花やしら雲代々の春

勝長壽院址

歌橋の南の方に入り込んだところ、大倉幕府頼朝屋敷の南向ひが大御堂ケ谷である。此處は阿彌陀山と言はれ、勝長壽院の舊址である。勝長壽院は源頼朝が亡父義朝の廟寺として建立した寺で、一名大御堂ともまた南御堂とも言ひ、公曉の爲めに弑せられた實朝を此處に葬り、二位尼も勝長壽院の奥に幽栖を營み、貞應元年七月此に移り御堂御所と稱せられ、其薨ずるや此に葬つたのである。而し實朝政子の墓は今はその所在が不明である。北條氏を興さんとて南朝の爲めに盡せし相模次郎時行が、足利勢に負けて宗徒の大名四十三人と共に自害したのも此堂である。

金槐集――雨そぼふれる朝に、勝長壽院の梅、所々咲けるを見て、花に結び付侍りし「古寺の朽木の梅も春雨にそぼちて花も綻びにけり」三月末つかた、勝長壽院に詣たりしに、ある僧山陰に隱れたるを見て、花はと問しかば、散ぬとなん答へ侍りしを聞て「行て見んと思ひし程に散にけるあやなの花や風たゝぬまに」「櫻花咲とみしまに散にけり夢かうつゝか春の山風」七月十四日の夜、勝長壽院のうらに侍りて、月さし入たりしに讀る「詠めやる軒のしのぶの露のまにいたくなふけそ秋の夜の月」(實朝)

東國紀行――大御堂と聞ゆるは、石巖のきびしきをさりて、道場の新なるを開きしより、禪僧菴を並べ、月おのつから祇宗の觀をとふらひ、行法座を重れ、風とこしなへに金磬の響をさそふ。…

新編風土記――太御堂、左馬頭義朝墓、今所在詳ならず、文治元年八月、賴朝先考の廟を安置せんが爲め、當院草創の事、潛に奏聞ありしに、法宮賴朝の勳功叡感の餘り、廷尉に勅して、東の獄門の邊より、義朝の首を尋出され、江判官公朝を以て、鎌府に贈らせらる「九月三日子尅、故左典廐御遺骨、副正淸首、奉葬南御堂之地、路次、二品着素服」とあるがごとし、其後火災あり「康元元年十二月、右大將家法華堂前燒亡、北風烈吹、勝長壽院并彌勒堂、五佛堂塔、悉以火、但本尊及一切經等、希有而奉取出之」、正嘉元年八月、勝長壽院可有造營之由被仰、本堂最明寺禪宮御沙汰、彌勒堂前武州、五佛堂奥州禪門、三重塔相州、九月造營事始、翌年六月供養也」再び造立せられて、足利殿の時まで繁榮す。

太平記――始め遠江の橋本より左夜中山、江尻、高橋、箱根山、相模河、片瀨、腰越、十間坂、此間十七箇度の戰に、平家二萬餘騎の兵、或は討れ或は創を被りて、今僅に三百餘騎に成ければ、諏訪三河守を始めとして、宗徒の大名四十三人、大御堂の内に走入、同く皆自害して、名を滅亡の跡に留ける、其死骸を見るに、皆面の皮を剝て、何れをそれとも見分されば、相模次郎時行も、定て此内にそ在んと、聞人哀を催しけり。

新編風土記――南新法華堂は二位家法華堂とも號す、二位禪尼の墳墓堂なり、延應元年五月、北條泰時の沙汰として、禪尼追福の爲に堂傍に浴室を建て、六齋の日毎に、僧徒をして入浴せしめられき。

荏柄天神社

賴朝屋敷跡の東北大手二階堂の路傍にある。此社は北野、太宰府に亞ぐの名祀であるが創設の年月が明確でない。源氏盛世の頃に既に舊祠とせられてゐたから、恐らくは七八百年以前の創設であらう。當社に傳へられた天神緣起を世に荏柄本と稱してゐる。本社に菅公束帶の像を祭り、境内に多くの梅樹を植ゑてゐる。又社前に關取場と稱へる所がある。此處は北條氏直が社前に關を据えて關錢を取り以て社殿造營の資に充てた處であると傳へられてゐる。

東鑑――建仁二年、九月十一日、荏柄社祭也、廣元朝臣、爲奉幣御使、建保元年、二月二十五日、囚人澁川刑部六郎兼守、謀逆事覺、明曉可誅之旨、被仰安達左衞門尉景盛訖、兼守傳聞之、不堪其愁緒、進十首詠歌於荏柄聖廟、工藤藤三祐高、去夜參籠荏柄社、今朝退去之刻、兼守所奉之十首歌、持參御所、將軍依賞翫此道給、御感之餘、則被宥其過矣。

新編風土記――荏柄聖廟、元文十七年、社頭造營の爲に、北條氏當所に關を居え、關錢を取りて社料に充つ、永祿四年、里見左馬頭義弘の軍勢、此關門を押破り、小田原の地に入りし事あり、關八州古戰錄曰「永祿四年、里見左馬頭義弘、相州三浦の地に屯を張り、正木左近太夫時忠父子等を、武州金澤へ働しめ、南方より守る處の、荏柄の關取て押破り、小田原の地に喰入んと、武威を震ふ」、今社前の陸田を關取場と云ひ、關錢を取り社造營の要脚に寄附せられし其名殘なり。

集古文書――永仁六年嚴島神主親範への下知狀に、鎌倉地東御門とあるは、東鑑「嘉禎元年正月、周防前司親實大倉家」とあると同所ならん、親範はその親實の裔孫なれば也。又今荏柄に辨天祠あり、東御門の地に當れば、嚴島辨天を宅址に遺す歟。一書に荏柄の末社辨天は境外にあり、當社は幕府大倉舘の郭内にありしが、舘を若宮大路に移せし時、荏柄の末社となれりと論ず。猶考ふべし。

杉本觀音堂

荏柄天神から右へ、滑川を渡りて二町のところにある。卽ち金澤街道である。大藏山杉本寺といひ、坂東巡禮札所第一である。天平六年行基上人の創設に係り、鎌倉に於ける最古の寺である。天臺宗叡山の末寺で本尊十一面觀世音三體は、右は惠心僧都の作、中は慈覺大師の作、左は行基菩薩の作で國寶に列せられてゐる。

東鑑――文治五年十一月、大倉觀音堂回祿、別當淨臺房走入焰中、奉出本尊、衲衣緣雖焦、身體敢無恙、云々建久二年九月、幕下御參大倉觀音堂、是行基草創、伽藍也、累年風霜侵、而甍破軒傾也、殊有御憐愍、爲修理以准布二百段奉加之給、云々、今寺領五石六斗。

報國寺

絹張山の下、宅間谷に在る。淨明寺の門前から滑川の橋を踰え此谷に這入るのである。此寺は足利尊氏の祖父、伊豫守家時の菩提所であつて、近世寺田十三貫文を傳へてゐたが、今は火災を經て殆んど廢頽に歸してゐる。臨濟宗である。

高僧傳――釋慧廣、號天岸、世姓伴氏、武州比企縣人、元德二年春、受府帳、住相之淨妙、建武元年、伊豫守源家時(足利氏)建報國寺、請廣爲第一世、建武二年三月寂、行年六十三、戒臘五十、諡徒塔于報國之側、庵曰休耕、勅諡佛乘禪師、所著偈讃、曰東歸集、

淨妙寺

二階堂谷の東南の谷、杉本寺の東五町のところにある。稻荷山と稱し足利尊氏の父、讃岐守貞氏の廟寺である。開山は退耕和尙、境內に松樹鬱茂し其北端に開山塔がある、退耕和尙の像及び源直義の像を安置してゐる。至德三年鎌倉五山の座次を定めらるゝとき、本寺は其の第五に班したのである。西岡に稻荷祠があ

り、鎌足公の勸請であつて、其地は彼の靈劍の鎌で納めた鎌倉山の舊地と言はれてゐる。

寺傳略記――足利尊氏、元應元年、爲報罔極思義、草當舊趾、剏七守、伽藍一新、雄圖改觀、稱山穗荷、以賽神德、元享二年奏京師、改寺淨妙、禪流輻湊、暮鐘朝鼓、叢林禮樂殆盛于此。

堯惠北國紀行――淨明寺に入て見るに、臺荒て春の草に傾き、檜皮朽て苔の綠に等し、今は少室一花開き、五葉の遺薫もつきぬる事かと覺ゆ、宿智の眉白きが出て語る、此山に杉の木高き社は稻荷明神也、白狐顯るゝ時は、寺家に祥瑞あり、門外叢祠は鎌を手向侍り、往古の緣起失て何の御神とも知らずと云へり、さては此御社は大織冠の御鎭座なり、山なる鎭守は、彼靈劍の鎌を納められし、鎌倉山是なりと覺て……

公方屋敷跡

淨妙寺の東隣にある。足利氏累代關東管頭の館地である。關東管領の威勢旺盛を極めたときは僭して管領を將軍と云ひ、公方又は御所と稱するに到つたので、後世此の地を公方屋敷跡と言ふのである。兩方の小丘を飯盛山と言ひ丘頂に富士權現を鎭してゐる。又東方の山際に二個の巖窟ありて窟の中に冷水を湛へてゐる。古への馬洗ひ場である。

湘中紀行――明王院東、平蕪芋眠者、故源基氏邸也、初鎌倉盛時、足利氏世家于此、自尊氏覇天下、居于京都、次子基氏鎭守關東、仍在焉、其後世至持氏出奔、既而其少子成氏來歸、修舊宅而居之、亡何遜古河、舊宅遂廢、然鎌倉人猶疑其或來也、不敢侮之、永爲逢蒿云。

新編國志――公方屋敷とは淨明寺の東の芝野也、此は足利氏の舊宅にて、關東管領相續て居住、寶德元年二月、成元鎌倉へ還住、即此に御所造營ありて、繁昌の時、京に似せて將軍或は公方と稱したり、故に今も公方屋敷と云ふ、成氏古河へ退かれて後も、子孫に至るまで、鎌倉へ歸らんと、しばしば鶴岡宮へ願文を捧げられ、されば人民も何れの時にか、公方御歸りあらんとて、畠にもせず、今に芝野にして置くとぞ、里老物語れり。

新編風土記稿――淨妙寺の足利邸は、足利義兼以來、歷世居住の宅ならん、大藏谷邸と云ふ、太平記に足利尊氏の京都に向ふや、二男千壽王を人質として、大藏ヶ谷に留め置きしに、元弘三年五月二日の夜半、千壽王潛に大藏ヶ谷を落て行方しらず、北條滅亡の後、千壽王下野國より再び此に還住すと云へり、又直義が將軍成良親王の執權として關東に下向の時も、此に居住せしなるべし。建武二年、千壽王叙爵せられ名を義詮と改め、東國を管領し、四年(延元二年)南朝奧州の國司北畠顯家鎌倉を攻むる時、義詮此に在りて軍事を指揮せり、貞和五年、義詮上洛の後は、弟基氏代りて關東管領となる、孫滿兼の時、應永十六年六月、失火して殿宇悉烏有となる、其年十二月造營成る、十七年滿兼逝き持氏嗣ぐ、二十三年禪秀の亂、持氏一旦此を沒落して駿州に走り、廿四年正月、禪秀平きて持氏又此に還れり、其後京都と不和を釀し、永享十年十一月、三

浦時高等當所を燒撃し、持氏沒落に及ぶ。此第廢滅する凡九年なり、文安四年十一月、持氏の遺子成氏管領となり、又此に還住す、然るに執事上杉憲忠と不和の事より、享德三年十二月憲忠を殺す、康正元年六月、今川範忠京都の下知を受け、鎌倉に攻め入り、此第を始め神社佛閣等を燒拂ふ、成氏敗れて古河に還る、此時より永く廢址となる、世に傳ふる寶德元年新造の圖に依れば、東西八十六間四尺南北百一間四尺と云ひ、此步積凡そ八千八百十一步餘にして、丑の隅二丈四方を缺きたり。

葛西谷

小町の管内、寶戒寺の東南にあたり、滑川を前にし、小富士山の下にある。小富士山は賴朝屋敷の正南なる獨峰で、小富士の北東は斷崖屹立して屏風の如く、其下を滑川が流れてゐる。此邊に文覺屋敷の名が殘つてゐる。葛西谷は東勝寺の舊地であつて、北條高時一門主從八百七十餘人が、勢極まつて自害したところである。

太平記——長崎新右衞門今年十五に成りけるが……年老いたる祖父の圓喜が肱のかゝりを二刀刺で、其刀にて己が腹をかき切て、祖父を取て引伏せて、其上に重つてぞ伏たりける。是を見て堂上に座を列れたる一門、他家の人々、雪の如くなる膚を推袒ぎ、腹を切る人もあり、自ら頭をかき落す人もあり、思々の最後の體殊に由々しく見えにけり……此處にて死せるもの總て八百七十人、此外門葉恩顧の者、僧俗男女をいはず、聞傳へ泉下に恩を報ずる人、世上に悲を催す者、遠國はいざ知らず、鎌倉中を考ふるに、總て六千餘人なり、嗚呼此日は如何なる日ぞや、元弘三年五月二十二日と申すに、平家九代の繁昌も一時に滅亡して、源氏多年の鬱懷一朝に開くことを得たり……

小田原記——天文二十三年十月、晴氏卿御隱居、鄕子義氏を公方に成し奉る、是は氏綱の御息女の腹に出來給ひし若宮なれば、小田原より御馳走は限りなし、則京公方より御吹擧あり、勅使を被立、左馬頭に補任あり、葛西谷に移り奉る。

滑川

鎌倉の主水脈であつて、大藏谷の奥、十二所に源を發し、西流して杉本、歌橋に於て二階堂川を併せ、寶戒寺の後に至つて西南に向ひ、小町大町の間を貫流して由比濱に注いでゐる。

ほたる火は百がものありなめり川　　梅翁

湘中紀行——鎌倉蓋一片大石、其擁腫爲山、缺處爲澗爲谷、而坦夷爲城市郊野也、故諸澗似亦一片石、澗底蒼滑、曰滑川、

新編國志——太平記に載するを見るに、青砥左衞門藤綱が屋敷此邊にありけるが、或時青砥左衞門夜に入て出仕しけるに、いつも燧袋に入て持たる錢を十文、取はづして此滑川に落したりけるを、五十錢を以て松明を買て尋出したるとなり、諸人是を聞き小利大損かなと笑ければ、左衞門眉をひそめ、さればこそ御邊達は愚にして世の費を不知、民を惠む心なき人なり、錢十文を只今求めずば、滑川の底に沈て長くうせぬべし。某

松明を買ひつる五十錢は、商人の家に留て長く失ふべからずと云へりとか、今按に、二程全書に程子雍華の間に遊ぶ、關西の學者六七人從行、一日千錢を亡ふ、僕者の曰、晨裝に遺るに非ず、必水を涉る時に此を沈むるならんと、程子曰、惜哉、人苟も此を得ば亡ぶに非ず、今廼水に墜ば用なし、吾是を以て此を歎ずと云ふ、是誠に異域同談なり、左衞門が心能く程子にかなへり。

覺園寺

大字二階堂の北、鷲ヶ峰の麓に在りて山號を鷲峰山と云ふ。禪律で京都の泉涌寺に屬し、永仁四年平ノ貞時の開基である。本尊は藥師如來であつて日光月光十二將が脇に侍つてゐる。寺地の東方に地藏堂があつて、俗に火燒地藏と呼ばれてゐる。昔は鎌倉の濱に在つたのを、後世東大寺の願行上人が此地へ徙したと云はれてゐる。背後の山に鎌倉十井の一なる棟立の井がある。水極めて清澄、弘法大師が此井を穿つて閼伽の水を汲んだと傳へられてゐる。同大師の護摩壇もある。背山には岩窟多く百餘個を數へられる。石塔や人骨を存し、塔銘によると應永四年が最も古い。惜しい哉大正大震災の爲めに方丈庫裡書院佛殿舍利殿總門唐門を全潰し今や之が復舊の途上にある。

新編風土記――覺園寺は義時の始めし藥師堂にや、東鑑「建保六年、七月九日未明、右京兆(義時)渡御大倉興、於南山際、卜便宜之地、建立一堂、可被安置藥師像。……

高僧傳――釋智海、字心慧、別號道照、不詳本貫、侍宗燈室、傳受毘尼、兼傳密乘、從忍性承通受羯磨、永仁四年、副元帥平貞時、開鷲峰山覺圓律寺、延爲開山贊揚律儀、化門弘多。至德三年國宣旨、覺圓寺者、心慧上人所建立也、奇峰昭嶢、深谷蒼莽、視此幽邃創於基趾、導北洛泉涌之派流、排東海律藏之講席、或顯或密、六度英衲駢闐、自東自西、三學緇徒輻至、去永仁四年、副元帥平貞時朝臣、爲計太元寇賊、捨財貨營造之者矣、刻樋丹楹、設堂宇之嚴麗、千柱萬梠、施廊廡之彫奇、剏復造立塔婆、准擬阿育王、弘願夙達天聽、特賜金剛寶殿題、寔相州之名鑒、海內之法窟也。

新編風土記――覺園寺地藏堂は大地殿の額を掛く、黑地藏と稱呼し、又里俗は火燒地藏と唱ふ、此堂舊くは鎌倉海濱に在しを、後理智光寺開山僧願行此に移せしなり、往時此像鑒佛にして、奇瑞多かりしこと沙石集に見えたり、高僧願行が傳中にも此事あり。

鎌倉宮

鶴岡八幡宮の東大凡五六町、鎌倉驛から十六町、大字二階堂、東光寺廢址の地に鎮座してゐる。明治二年特詔を以て大塔宮護良親王の廟を此地に建てられ、華表に懸る「鎌倉宮」三大字の額は明治天皇の御親筆である。卽ち傳說によりて、東光寺邊に岩穴があるので、之れを親王薨去の故跡となし、其前に造營せられたので

ある。明治六年官幣中社に列せられた。本社は我國の古式に則り、漆堊を施さず金銀を鏤めず、素朴にして清麗、賽人をして自ら襟を正さしむるの威嚴がある。社の背後に土牢がある。二段の石窟があつて、窟の濶さ八疊許り、今は入口に板圍を設けて漫りに人の入るを禁じられてある。親王は建武年間足利直義の爲めに此處に幽閉せられ給ひ、同二年七月二十三日逆臣淵邊義博の毒手にかゝつて薨去された。社の左方に二つの小社がある。前なるは親王の忠臣村上義光を祀り、後なるは吉野十津川の志士竹原八郎の女(南の方とて牢中の親王御最後まで侍いた女)の靈を祀つてある。

湘中紀行——覺園寺南里許、山下田畝者、故東光寺墟也、其東山足有地牢、是源直義囚兵部王護良、尋殺之所也、披荊棘而視之、巖穴約深大牢、廣亦加之、口窄內寬、可坐二十人、穴口崩頹、不可輙入、稍々窺之。

新編風土記——建武二年五月足利直義大塔宮を東國に下し、土牢を構へて禁獄せしは東光寺なり、太平記曰「五月三日宮を直義朝臣に渡されければ、數百騎の軍勢を以て、路次を警固し、鎌倉へ下し奉りて、二階堂の谷に土の牢を塗てぞ置進らせける」

(此の太平記の文意を考へると、土をもつて塗籠たる獄舍といふ意であつて、山腹を掘穿した土穴とは思はれない。且つ淵邊義博が宮を弑する條に「牢の御所に」參ると記し「御輿を庭に搔居たるを御覽して」などあるを見れば、土穴とは思はれない點がある、梅松論には「二階堂の藥師堂谷の御所」と記し、櫻雲記、鎌倉大日記等には正しく東光寺にて弑すとあるから、矢張り塗牢を造つて幽閉し奉つてゐたものと思はれる)

東光寺、弔大塔兵部卿親王　義堂

塔影稜々半入雲、王孫會此酒啼痕、獄中劍氣衝天起、門外兵塵蔽日昏、山鳥乍驚龍鳳質、野童何識帝王尊、興亡不上禪僧眼、只見靈光巋獨存(空華集)

瑞泉寺

鎌倉宮の東八町許、西面して山腹に在る。錦屏山と稱し、臨濟宗圓覺寺に屬し、足利公方の廟寺の第一である。瑞泉は基氏の廟號であつて、今に基氏、氏滿並に疎石の遺像を安置してゐる。

壬寅冬、瑞泉蘭若席上、和通叟詩、奉贈武衞將軍源公、兼簡幕下諸公、　義堂

汗馬防邊十二年、歸來故里問先賢、春風父老千家酒、曉日旌旗萬戶煙、鳥報嘉音驚剝啄、山回喜色動連娟、野人擬繼甘棠詠、君子應歌杖杜篇。將軍弓馬白髮年、儒雅風流也復賢、借問蔞亭分豆粥、何如禪榻看茶煙、參軍席上吟蠻語、典午檐前懷季娟、回首青雲猶咫尺、未應便賦卜居篇。(空華集)

再入瑞泉　義堂

白髮重來住此山、傍人咲我未甘閑、青氈舊物依然在、月對松門夜不關。

高僧傳——釋疎石號夢窓、嘉曆元年季秋、寓相之南芳菴、平帥延住淨智、翌歲開錦屏山瑞泉寺。

空華日工抄――貞治六年四月二十六日、告府君（基氏）薨矣、余乃入府、遺命葬于瑞泉精舍、仍捨安房群房莊、爲冥福之資、二十七日、浴靈換衣、仍脱余之所著羅衣被之、袈裟乃府君所藏也、余主喪事業、依古佛之法、而闍維、請五山諸長老引導、中巖讃曰、聖斤剛正鶴鴒詩、耳史修成布詞、誰識寥々千歳後、瑞泉甘露洒禪枝。

鎌倉大草紙――應永五年十一月、氏滿四十六歳にて御逝去、去年夏より精進潔齋にて御讀經、逆修の御弔御勤有けるる、永安寺殿と號す。瑞泉寺に於て御弔、又小祥忌には奥州の稻村滿貞公より執行せらる。

新編風土記――長春院とは持氏の塔所なり、後世墳墓の所在詳ならず、今名越別願寺に持氏の墓と傳ふるものあれど、其實定かならず、勝光院とは滿兼の塔所なり、墳墓の所在詳ならず。

一覽亭址

瑞泉寺の後峰十八曲坂を攀ぢたところが一覽亭の址である。一覽亭は元祿年間水戸黄門光圀卿が山上に一堂を建立して千手觀音の像を安置し、其傍に寮を建て、爰に一覽亭集の原本を板に彫つて掛けて置いたのであつたが天明年中に堂も寮も共に破壞したのである。一覽亭集といふのは嘉暦年中建長寺の清拙和尚が一覽亭記を作り、東西五山の衆僧が詩を寄せて相唱和し、之れを集めて一卷となしたものである。

○

天封尺地許歸休、致遠鈎深得自由、到此人々眼皮綻、河沙風景我焉庚（夢窓語錄）

○

面々峯巒翠作堆、目前無地着塵埃、十洲三島欄干外、何事赤松招不來（一覽亭詩集）

○

欄干縹緲錦峰頭、塊視三山與十洲、翠玉一峰知岳華、青煙九點見齊洲、無窮雲接蒼梧晚、不盡波涵碧海秋、便欲題詩招李白、御風騎氣共仙遊。

空華日工抄――河南陵仁、字元良、稱雪樵、蘇州教授、避亂漂泊博多津、已兩三年矣、近聞青巾一統、而江南兩浙稍安將歸、有錦屏詩、戊申夏四月、余自博多至高瀨、將附海航歸浙西、適與要關上人會于永樂園若、遂相共周旋者數日、斯文之誼可雅尚也、且言相州錦屏山水之秀、并索余賦之、因想像其勝作、四句一首、併簡義堂禪師、因發一哂云、日本諸山秀可觀、錦屏有更好峰巒、乾坤一覽無餘界、雲霧相連十八盤、瀑瀉岩前明似練、霜飛谷口涯如丹、幾時絶頂探奇勝、試向危亭共倚欄、

梅花無盡藏――尋瑞泉之古刹、攀斷崖數十丈、認一覽亭所在、只殘礎縱横、亭子不存、枝茂林深、四面之風致、十一不能望之、遠則富士之半嶺、近則鶴岡之左股、僅掛蜘蛛之網底耳、國師行道之寶地、四衆絶輻輳之跡、紫苔荒而黄葉積、無一木可支之公案、吁監院之懶歟、寺産之薄歟、抑亦山靈之秘清境歟、未爲易識焉、謹作一覽亭詩曰、東隱素念別非鞭、一覽亭西富士煙、殘礎苔荒黄葉積、蛛絲底有國師禪。

巨福路坂

鎌倉七切通の一つである。鎌倉は一面相模灘に面し他の三方は山巒を以て圍繞された別天地をなしてゐるので、山を切り開いて他郷との交通路を作つたものが所謂七切通であつて、何れも極めて要害の地である。雪の下から山内建長寺の前へ出る切通が巨福呂坂であつて、元弘三年新田義貞の軍勢が第一番に此坂を破つて亂入したことが太平記に載つてゐる。

新編風土記――鎌倉志に、太平記、神明鏡に記せし巨福呂坂は當所にあらず、巨福呂谷といふ所あり、是を指すなりと云へり、されど太平記に「義貞武州關戸にて、其勢を三手に分け、極樂寺切通、假粧坂、巨福呂坂等の三所に指向る事」を記し、其所指の地名、皆鎌倉の口々なれば、巨福呂坂も當所たること論なし。

東鑑――仁治元年十月、於前武州御亭、可被造山内道路之由、有其沙汰、安東藤内左御門尉奉行之、十九日、爲前武州(北條泰時)御沙汰、被造山内道、是嶮難之間、依有往還煩也。

建長寺

鎌倉驛の西十七町、小阪村大字山ノ内字小袋阪にある。禪宗にして巨福山と號し、鎌倉五山の第一である。山門に十六羅漢、本堂欄間に左甚五郎作の天人の像がある。建長元年北條時頼、京都の天台眞言二宗に對比すべき宗派を求めてゐた際、折よく宗の高僧大覺禪師道隆が渡來したので、師を以て開祖としたのである。寺域五千二百二十坪、創始の堂塔は應永の大火にて灰燼に歸したが、現存の山門は永享年間足利持氏の再建にかゝり、佛殿にある時頼の木像は國寶に列せられてゐる。其東に外門及び總門があり、其額「巨福山」の三字は寧一山の筆であつて、巨の字に一點が加へられてゐる。之を俗に百貫點と呼んでゐる。總門の裡に山門があり、構造は都て宋の寺門に模擬し、其の規模の大なる、彫刻の奇なる他に其比を見ない。山門の樓上には昔時十六羅漢の像を安置してゐたが、何時の頃か紛失して今は僅かに其半ばを殘してゐるに過ぎない。山門の正面に佛殿がある。應行作長一寸五分の地藏尊を安置してある。傳ふる處によれば當寺の創建以前は此地を地獄谷と稱し、罪人の刑場であつたのである。時頼の時代に濟田某なるもの、罪を犯して斬罪に處せらるゝに臨み、太刀取が二刀まで切つたけれども斬れず、怪しんで其故を問へば、濟田某の曰く、我れ平生地藏菩薩を信仰し今も猶ほ髻の内に之を藏して居る、刀の鈍つたのは其の故で

あると。後之を佛殿に安置して本尊としたのである。其東に觀音堂と浴室があり、嵩山門を入つて左折すれば開山堂の前に出る。堂の後に佛光塔、開山の碑があり、西は一堆の丘陵になつてゐて末院がある。後山には開山坐禪窟、一遍上人坐禪窟がある。寺寶頗る多く、就中開山所持の圓鑑の如きは古雅愛すべき名器である。其他賴朝の富士の巻狩に用ゐた陣太鼓等を今尚藏してゐる。大正の大震災に建築物は佛殿鐘樓等大半倒壞したが、今は大略復舊してゐる。

蘓碧池　　俊明極

譜繫地爲沼、寒泉涵泳深、青木浮水面、翠巘侵波心、竪看山形側、横觀樹影沈、晩遊成勝賞、聊作五言吟。

新編風土記――今の佛殿は久能山東照宮拜殿を再造せられし時、其舊殿を賜ふと、或は增上寺崇源院殿御靈屋の拜殿を賜はりしなりとも云へり、其製尋常の寺院に異なり、唐戸彫物の彩色も今皆剝落せり、法堂は山門と佛殿の間に在り、近く文化年中に造立す。

鎌倉九代記――應永二十一年十二月二十八日西尅、建長寺門前の在家より失火し、やがて燒鎭りけるが、僅なる細火ひとつ遙に七八町を隔てゝ飛去、建長寺の塔の五重の上に落、漸々大に燃えはびこり、本堂祖師堂、方丈衣鉢閣、鐘樓輪藏、寮舍浴室、鎭主土地堂、山門脇門、廊下惣門に至るまで同時に燃立て、一宇も殘らず灰燼となる、佛具經論資財雜物は選ぶべき暇なし。

湘中紀行――建長寺、門外二所、東者南向、署曰海東法窟、西者西向、署曰天下禪林、東門內少西、建大門、署曰巨福山、相傳元僧一山書、北爲樓門、署曰建長興國禪寺、宗僧子曇書、樓門之北爲佛殿、西北方丈、東爲西來、他殿堂不足道、蓋已衰矣、要之、山木岑蔚蕭條、使人起懷古之感、實多籃也。

半僧坊

建長寺の佛殿を出で、左側の杉並木の間を奥の方へと進めば、勝上嶽の半僧坊に達するのである。近來流行の權現で、參詣遊覽の客頗る多く、山內に數軒の飲食店が出來たほどである。左方の舊道から上つて、新道の方から下るのが風景を賞するには都合が可い。勝上嶽の頂上に登ると、樹間を透して鎌倉一圓の瓦甍の彼方に相模灘を望み得べく、北方を顧みれば戸塚の市街から背後の群山の起伏と西方碧空に富士の雄姿を望み得られる。之れも大正震災に全潰したが既に復舊されてゐる。

長壽寺

建長寺を出て西に二町ばかり行くと、左に登る龜ヶ谷坂の入口に長壽寺がある。臨濟十刹の第一で寶龜山と號す。足利基氏が父尊氏追福のために建てたもので尊氏の塔がある。尊氏を長壽寺殿妙義仁山居士と號す。本堂には釋迦佛の像を安し、又尊氏束帶の像を置いてある。寺の前を西に進めば鐵道線路の踏切があり、

その右手の山際の畠は、昔山内管領の邸趾であるので、管領屋敷と呼ばれてゐる。

明月院

圓覺寺の東南、淨智寺の前方にある。古の最明寺(禪興寺)の遺墟であつて北條時賴幽栖の地であり、上杉憲方の廟塔である。隆蘭溪の作、時賴の泥塑像を安置してゐる。

新編國志――明月院は上杉安房守憲方の建立にて、憲方法名元壽道合と號す、此院は昔禪興寺の塔頭なりしが、今は方丈とし、建長寺領の內三十一貫文を配分す、道合の墓は明月院の岩窟にあり、禪興寺は北條時賴建立、卽最明寺とも云ひ、其伽藍ありしを、足利滿氏再興せられ、關東十刹の第一也、後世佛殿計り殘るを、今明月院之を持分にし、時賴の泥塑像を安置す、隆蘭溪の作とぞ、東鑑に「建長八年七月、將軍家(宗尊親王)山門最明寺參詣禮佛」のこと見ゆ。

高僧傳――建長壬子冬、營大伽藍、號巨福山建長寺、請隆爲開山、初居十三年有詔、遷洛之建仁、歷三歲、返東關、副元帥時宗、開禪興寺而居、無何還于建長。

新編風土記――上杉道合塔は方丈の西北岩窟の中にあり、窟中左右に十六羅漢、中央に釋迦靈寶の像を彫る、鎌倉九代記に道合を極樂寺に葬りし事を記す「上杉安房守入道道合は、應永元年十月二十四日、朝の霜と諸ともに消行ける、屍をば極樂寺に送りて草根一堆の墳の主となす」さては當所は全く塔所のみなるにや、其實詳ならず明月庵址とは道合石塔の前畠を云ふ、昔は此に道合の靈屋ありしとなり。

東慶寺

驛の北二十二町、圓覺寺の南、通路を隔てたところにある。其地を松ヶ岡と稱す。臨濟宗の尼院にして俗に緣切寺とも云ひ、一種の寺法があつて、明治維新の際まで、緣切の特權を維持してゐた。皇女を始め豐臣秀賴の女などが住してゐたので、幾多の哀話が傳へられてゐる。近頃は遺法が廢れて、釋宗演師等も此處に居られた。

新編國志――松ヶ岡東慶寺開山覺山尼は北條時宗の室(秋田城介義景の女)にて、貞時の母也、弘安八年落飾、當寺を創む、潮音院覺山志道和尙と號す、其後南朝の姫宮(後醍醐帝の女、用堂尼)豐臣氏の女(秀賴の女天秀尼)なども住せり、今寺領百二十貫文也(永祿役帳、松岡殿、寺領三十貫文)鐘は豆州韮山本立寺にあり、銘曰、梵利置鐘兮、令人天休息輪廻苦、利益大矣、松岡住山了道長老、以寺用百緡、鑄洪鐘、求銘於圓覺清拙叟、銘曰、松岡之山、寺曰東慶、左建右圓、天近樓迎(中略)檀門福壽、紺園殊勝、千萬秋年、國界安靜、壬申元德四年、結制後二日、都寺比丘尼遠峯性玄、首坐比丘尼無染親證、住持比丘尼杲庵了道、大檀那菩薩戒尼圓成。

新編風土記――東慶寺記曰、鎌倉殿へ覺山願ひ候は、出家の身ながら、女の事に候へば、利益の種も無御座、就夫、女と申者は、不法の夫にも身を任せ候事、尋常に候へ共、女は狹き心にては、風と邪の思立にて、自殺など致し候者有之事に候間、三ヶ年の內、當寺に相抱、何卒緣切り候て、身輕に成候寺法、相願候由、依之、貞時より被經天聽被任其意候、當寺二十世大秀尼は、大阪落城の後入寺す、これ秀忠公の外孫なり、將軍家より其望を申出てよとの事ありしかば、卽開山よりの寺法永く斷絕なからん事を申され、其乞に任せらるゝと、開山よりの寺法とは、凡て婦人一旦不法の夫に配し、容易く休離れ難き故ありて、寃屈に堪へず、躬つから身を過つ者あり、其類奔りて當寺に入る時は、三ヶ年の際抱置、其身の望を果さしむるを以て寺法とす、佛殿方丈は駿河亞相忠長卿の舊館を移し賜はりしものとす、寬永十一年の棟札に「大檀那、征夷大將軍源秀忠公息女、天壽院殿御建立、住持、關東公方家左兵衞督源頼綱息女、法清和尙弟子、右大臣豐臣秀頼公息女、法泰藏主御寄進也、當大樹御乳母、春日局御執持爲」。

春臺湘中紀行――松岡有東慶尼寺焉、平時宗妻、貞時母藤氏、爲尼號覺山、造此而居之、後多度貴家女、遂爲女僧叢林也、建重門誰何出入、禁男子也、寺法、世之女子、欲爲尼、而父兄不見許者、一入是寺、則父兄不得不棄、卒至有婦人惡其良人、而不得去、及有淫行而懼發覺、有貳心而欲改嫁者、斷髮而入是寺、則丈夫不得制之、居兩閱歲、養髮復故、則復出適人、官無明法、前夫亦無如之何、此其所以嚴禁男子也、夫尼寺禁男、以防淫也、今乃禁男、以助世之婦人淫行、孰謂松岡非淫婦之叢林乎。

淨智寺

長壽寺の西、東慶寺の東隣なる山上に在り、金峰と云ひ、禪宗、鎌倉五山の第四であつて、開山は文永六年我邦に渡來した宗の佛源禪師兀庵であり、開基は北條師時である、寺門の前は小袋坂道であつて、北は明月院と相對し、境內に山門あり、開山塔あり、佛殿あり、佛殿には本尊釋迦佛及び師時の位牌を安置し、開山塔には眞應禪師の像を安置してゐる、開山塔のうしろには甘露の井といふのがある。卽ち鎌倉十井の一である。又門外左の路傍にも淸泉あつて、之れをも甘露の井と稱してゐる。

釋書――普寧號兀庵、久應元年來舶、副元帥平時賴、迎歸相陽、寓止巨福山、住持蘭溪者、寧之蔣山舊友也、令正於函丈、禪規整濟、號令嚴密、東方叢社、指爲法窟、後復宋國。

新編風土記――淨智開祖は普寧、請待開山は正準、開山は宏海（嘉元元年正月寂、眞應禪師と謚す、高僧傳曰、釋宏海、號南州、不詳其氏譜、依兀庵寧公於建長、受庵付屬、出世金華、構藏雲庵、爲終焉處、海公以高德而有功、山中寺象推準開山）開基は北條武藏守宗政、同相模守師時父子なり（宗政は相模守相頼男、評定衆引付頭、弘安四年八月卒せり）其年序に於て甚懸隔せり、寧が宋に歸りしは文永二年にして、是年宗政僅に十三歲、師時未生以前なれば、事實に適はず今推考するに、宗政が死後、其室などが親族をかたらひ、弘安

の末に當寺を起立し、亡父宗政幼子師時を合せて開基と唱へ、海を延て第一祖とす、然るに海壯年其任に中らずとし、念を請し且亡師墓をたて開山祖とし、其身は六世と稱せしなるべし。

圓覺寺

驛の北三十二町、鎌倉五山の第二位に列し禪宗にして瑞鹿山と號す、圓覺寺派の大本山である。弘安五年北條時宗當寺を創建し、開山は宋の佛光禪師祖元である。祖元は大覺禪師の後をうけて禪宗を盛にし、又時宗輔翼に力のあつた英僧である、寺域一萬七千五百九十四坪、域内老杉古柏森々と生ひ茂りて晝尙ほ暗きところが如何にも禪寺の趣きがある。其門前は西市場に通ずる街道に衝り、南に總門がある。宋の寺門に摸擬した建築であつて、後光嚴天皇宸筆の額を掲げてゐる。本尊は寶冠釋迦佛であつて佛殿に安し、同帝の宸筆大光明寶殿五字の額がある。又佛殿の西北五六町の處に開山塔がある。正續院と云ふ。此院は昔し北條貞時の建立であつて、佛牙の舍利殿であつたのを、後ち開山塔とし、佛光禪師の木像を安してゐる。此の堂は宋の建築手法を傳へた代表物として特別保護建造物となつてゐる、中央の須彌壇は國寶である。此の堂も大正大震災で潰れたのを其後改築された。其他方丈あり佛日庵ありこれも地震で潰れて改築された。宿龍池、妙香池、坐禪窟、虎歌岩等皆境内にある。又寺寶として佛牙の舍利、時宗、貞時、高時等の書、尊氏自筆の法華經、義滿の墨蹟、南山自贊の畫像、開山所持の硯等を藏してゐる。右の山腹にある洪鐘は鎌倉三大鐘の一つとして名物に數へられてゐる、方丈の左を進んで行けば山麓に池がある。古木蟠踞し、怪巖水に臨んで極めて幽邃である、佛日庵に時宗の廟があり、時宗の木像、時宗、貞時、及び高時の位牌があり、時宗の墓も亦此のほとりにある。明治三十七年五月十七日位一位を贈られた、廟内に昭憲皇太皇后の御製がある

あだなみはふたゝびよせずなりにけりかまくら山の松のあらしに

釋書祖元傳——弘安五年、圓覺寺成、平副帥時宗、命元爲開山第一祖、開堂之日、群鹿臨筵、元爲吉徵、卽名山以瑞鹿。

子墨傳——副帥貞時、迎臺居圓覺大伽藍、移董建長、滅諡大通禪師。

本寺鐘銘——相模州瑞鹿山、圓覺興聖禪寺鐘銘鶴岡之北、富士之東、有大圓覺、爲釋氏宮、(中略)正安三年癸

丑八月、大鐘昇樓、（中略）住持、宋西澗和尚、子曇。

湘中紀行——圓覺寺大門、署曰瑞鹿山、天皇彌仁書也、山上有鐘樓、是正安中所鑄、平貞時進銅、子曇作銘、鎌倉諸名刹、唯此鐘爲大、佛殿署曰大光明殿、亦天皇彌仁書也、大抵圓覺地域、不及建長、山淺也、而衰廢過之、雖然歷覽遺跡、想見當時宏麗、關中梵宇、唯此與建長、可以爲稱首矣。

游相記事——圓覺、宋國僧祖元開之、謚佛光、有像精工殊絕、顏面如生、掛金字榜、曰慈照、平時宗手書、渾雄可愛、

龜谷坂

龜谷から山内に越ゆる坂路である、今鐵道隧道は此坂路の西方を經由してゐる。

○

穿山涉水苦相尋、盡日扶筇行且吟、露下鶴岡華表舊、雲歸龜谷樹陰深、地形磊落英雄略、兵氣摧殘億萬心、父老幸能談故事、幾人回首又披襟、

太宰春臺

扇谷

佐介谷の東北に隣る町名であつて雪の下の西である。本來扇谷は總名龜谷の中であつたのを、扇谷在住の上杉定正が家聲を揚げたために其名大に顯れ、遂に龜谷に代つて總名となつたのである。

新編風土記——扇谷とは、此地飯盛山の下に扇の井と稱せる清泉あれば、やがて是にもとつけるならん、此邊古は總て龜谷と唱へ、扇谷は其中なる一所の小名なり、按するに東鑑扇谷の地名所見なし、されど管領上杉定正爰に住し、世に扇谷殿と稱せられしより、龜谷の唱は漸く廢れ、專扇谷と稱へならへるなり、元弘三年、新田義貞鎌倉に攻入し時、此にて合戰の事、太平記に見ゆ、曰く、五月廿一日、長崎三郎左衞門入道思元、子息勘解由左衞門爲基二人は、極樂寺の切通へ向ひて、責め入る敵を支へて防ぎけるが、敵の鬨の聲已に小町口に聞えて、鎌倉殿の御屋形に火かゝりぬと見えしかば、小町口へぞ向ひける、斯る處に、天狗堂と扇ヶ谷に軍ありと見えければ、長崎父子左右へ別れて馳せ向ふ。今日を限りと戰ひしが、廿一日の合戰に、由井ヶ濱の大勢を東西南北にかけ散し、敵味方の目を驚し、其後は生死を知らずなりにけり

永享記——永享十年十一月一日、三浦介時高を大將にて、二階堂の人々、持朝の被官、一味同心して、大藏の御所へ押寄せける、折節警固の兵少なければ、案内は知りたり、大庭へ亂入る、御所方の人々若公をば扇谷へ奉落。

新編風土記——扇谷村の住人、鍛工彌右衞門は、正宗より五代廣正以來當所に住し、近世は中興綱廣より以後綱廣を通稱とす御分國以後は江戸より太刀鐺鏃等の製造を命ぜられ、今に給地あり、永祿役帳にも綱廣鍛治十九貫文の給田ありしと見えたり。

貿易備考——昔源頼朝府を鎌倉に開くに及んで、諸工人此に集まる、其製する所の器物中、或は彫木器を出す、其文は即牡丹、梅花、菱、紗綾形、雲形等を彫り、先づ黑漆を施し、其上更に赤漆を施して、裝飾せしもの

なり、器の内面は皆黒漆塗なり、後世之を鎌倉彫と曰ふ、其製粗にして雅致あり。

新編國志――扇谷は壽福寺の東向に華光院とて眞言寺あり、其前は上杉定政の舊宅とし、今は畑なれど、專扇谷屋敷と呼ぶ。

化粧坂

扇谷から葛原岡に出る坂路であつて、或は氣生坂に作る。昔し平家大將の首を化粧して實檢に供したので此名がある。元弘三年新田義貞の兵三軍に分れ、一手は此地から進みて高時を亡ぼし又應永二十三年には此地に上杉禪秀の亂があり、其坂上には往時六株の古松ありて之を六本松と稱したが今は枯落し僅に數株の稚松を存してゐる

新編國志――假粧又は形勢に作る、扇谷より西の方へ行く坂なり、往還の道なれど、東鑑には見えず、太平記に、新田義貞の大軍五十萬假粧坂より寄するとあり、大草子に禪秀亂の時、佐介谷に居られし御所方より、氣生坂へ三浦の人々を差向けらるとある。

葛原岡神社

化粧坂の盡頭字深谷にある、明治十八年の新設にして藤原俊基を祭つてゐる。俊基は藤原資朝と共に、後醍醐天皇及び護良親王に仕へて功績あり、天

皇の爲め北條高時を誅せんと謀り事露れて葛原岡に斬首せられたのである。その墓標は永く野草の間に埋もれてゐたのを明治の昭代に遇つて曩に從三位を贈られ其靈を吉野に祭り、又此地に神社を造營したのである。その墓碑は社背一段高い處に在り周圍に欄を設けて人の入るを禁じてゐる。

新編國志――葛原岡とは假粧坂を越えて北の野也、元弘元年、相模入道が、右少辨俊基を害しける地とし、彼辭世に「古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水清秋かまたで葛原岡に消ゆる身の露の恨や世にのこるらん

太平記――俊基朝臣は殊更謀叛の張本なれば、遠國に流すまでも有べからず、近日に鎌倉中にて斬奉るべしと定られける、俊基既に張輿に乘られて、假粧坂へ出給ふ、爰にて工藤二郎左衞門尉請取て、葛原岡に大幕引て敷皮の上に座し給へり。

景清土牢

化粧坂へ登る道路の左傍にあつて窟の濶さ方二間許り、半ば壞れた大岩窟である。建久六年奈良大佛供養の日に降人となつた上總七兵衞景清を幽閉したる土牢であると傳へられてゐる。景清は鎌倉に降り、八田知家の宅に預けられた。其

後建久七年三月七日大佛供養の日を數へ、湯水を絶ち遂に牢中に死んだのである。又景清の娘を龜ヶ谷の長に預けたが、後其娘は亡父追福の爲め窟の傍らに庵を設けて十一面觀世音を安し、庵を向陽庵と號したが今は無い。

海藏寺

扇谷の西奥の極限のところに、山内淨智寺と峰を隔てゝ臨濟宗建長寺派の海藏寺がある。扇谷山と號す。門前に底拔の井といふのがある。これは金澤顯時の妻が悟を開いたところで、左の歌が石に刻されてある

千代のうが頂く桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらず

此寺にある十六の井は弘法大師が獨鈷で穿つたと言ひ傳へられてゐる。開山は源翁和尚、本尊は藥師佛である。

新編風土記――建長寺の西來庵の鐘は、扇谷海藏寺のものにて、彼寺大檀那、上杉彈正少弼氏定(入道常繼)が勸進なり、即應二十二年十一月鑄造の銘あり「相州扇谷山海藏寺、常住鐘、勸進聖正南上座、大檀那常經、應永念二年十一月」又二十五條袈裟一項、裏に佛超禪庵空外叟の七字を朱にて書し、下に華押を墨にて書す、空外は源翁の號なり、又「武州多東郡、天士淨底居士檀那也、至德乙丑二月念五日」と朱書す。

英勝寺

扇ヶ谷壽福寺の北隣にあつて東光山と號し淨土宗である、寺域はもと扇ヶ谷上杉の臣太田道灌舊宅の地であつて、寛永中太田英勝院禪尼此處に念佛道場を營む。英勝尼は太田新六郎康賢の女で、家康の恩を蒙り、水戸侯頼房の准母である。家康の沒後尼となつて此處に後世を送つたといふことである。其後水戸中納言頼房の女玉峰尼が入寺して其住職となつた。本尊は運慶作の阿彌陀佛であつて佛殿に安置し、左右に善道、法然の像がある。佛殿の前に山門があつて、後水尾天皇宸筆英勝寺三字の額を掲げてゐる。又佛殿の西に英勝院太夫人の墓並に祠堂がある。墓碑に左の文が彫りつけられてゐる。

太夫人源姓、太田氏、諱勝、父曰康資、母藤氏、遠山丹波守直景女也、太夫人笄歳始事東照大神君、侍枕席、被恩寵、誕一女、早夭、神君愍其無頼、命水戸侯頼房、爲其准母、神君薨後、薙髪爲尼、號英勝院、時々拜謁臺德公、逮大猷公治世、咨遇特加、常侍營中談舊事、寛永十一年六月、賜鎌倉扇谷數百弓地、建淨刹號英勝寺、奉命養頼房女、爲比丘尼、號玉峯淸因、住持此寺、乃是太夫人高祖、左衞門太夫道灌之舊蹤、所謂源氏山也、十五年、賜池子村地、爲寺田、十八年秋、太夫人寢疾、大猷公親臨問、恩光之隆、爲世美談、明年

八月遂屬纊、時六十五、大猷公哀惜、賻儀鄭重、執奏、賜宸筆額扁寺、且賜常紫衣宣旨、可謂身後之榮、施之不朽者也、孝孫源光圀立。

壽福寺

驛の北六町、英勝寺の南、源氏山の麓に當り、圓覺寺から龜ヶ谷坂へ引返して扇谷に入ると右側にある。禪宗にして龜谷山と號し、鎌倉五山の第三である。開基は政子、開山は千光國師榮西で、境内は昔し源頼義、同義家が東國征討の際に暫く僑居したところと言はれてゐる。佛殿には唐の陳和卿の作、籠釋迦を安し、由緒ある名刹であるが、近年極めて衰頽してゐる。寺の背後の山麓に畫窟といふのがある。土地の人はカラクサヤグラと呼んでゐる。一丈四方の岩窟に牡丹唐草の如き彩色が施されてゐる。又窟の中に實朝の塔並に政子の塔がある。開山千光國師は頼朝の歸依僧で、政子も亦國師及び二世行勇和尚を信仰したから、其歿後追善の爲め行勇の建立したものであらう。寺門の東南觀音山の巓に望夫石と云ふのがある。畠山重保出比ヶ濱出陣の時、其妻別れを惜みて悲嘆に堪えず、終に石上に死んだと云ひ傳へられ

てゐる。

新編國志――岩屋小路の西を龜谷と云ふ、源氏山あり、本は龜谷山といふ、龜谷の中央とかや、扇谷、梅谷、泉谷など皆此龜谷の内也、壽福寺は龜谷山金剛壽福寺と云ひ、開山は千光國師榮西、本邦禪林の鼻祖なり、此地は東鑑「治承四年十月六日、武藏(頼朝)着御于相模國、畠山次郎爲先陣、千葉介常胤候御後、凡扈從軍士、不知幾千萬、楚忽之間、未及營作沙汰、以民屋被御宿館、云々、七日先奉遙拜鶴岡八幡宮給、監臨故左典厩(義朝)之龜谷御舊跡給、即點當所、可被建御亭之由、雖有其沙汰、地形非廣、又岡崎平四郎義實、爲奉訪被殁後、建一梵宇、仍被停其職」云々とある舊跡とす、其後實朝公の時、故左典厩沼濱の舊宅を此に移し、榮西律師を置かれたり、即ち本寺の開山とす、五山を定めらるゝに及び、第三に班し、近世寺領八貫五百文。

東鑑――正治二年閏二月、爲尼御臺所御願、爲建立伽藍、被點出土屋次郎義清龜谷之地、是下野國司御舊跡也、爲報其恩、岡崎義實兼建草堂也、被寄附葉上房律師榮西、可爲清淨結界之田、被仰下。七月、於金剛壽福寺、新圖十六羅漢、被遂開眼供養、導師當寺長老、葉上房律師榮西也、尼御臺所爲御聽聞有參堂。建仁二年三月、壞故大僕卿沼、濱御舊宅、於鎌倉、被寄附于榮西律師龜谷寺、行光奉行之。建保元年六月、壽福寺長老榮西、自京都參着日來所望大師號、去月有議定、存世大師號事、本朝依無先蹤、被任權僧正、元權律師。十二月、將軍家御參壽福寺、令修佛事給、是爲和田義盛以下七命得脫。

釋書――建保三年、榮西在相州龜谷、營壽福寺、一日辭源僕射實朝、僕射曰師已老、寺未成、何事行乎、對曰欲入王城取滅耳、即歸京、夏示微疾、安祥而逝、實七月七日也、又云、圓爾自宋歸、居于京、遂赴相州、副

元帥平時賴、館龜谷山、延府裡、受禪門菩薩戒、龜谷山榮西創之、禪規末全、爾之重入相陽、平副元帥命行叢矩、於是住持處偏室、爾南面而行事、鐘鼓魚板、一時改響、蓋以爾之遍歷臨安諸刹、諳熟儀法也、又云、大休、住禪興時、夢觀音大士、告曰、逢强則止、後十年、由建長移龜谷、仰見額有金剛寺、始明聖謨、正應二年寂、諸徒收龜谷塔。

新編風土記——畵窟は壽福寺の後背、山麓にあり、土俗エカキヤクラともカラクサヤクラとも言ふ。岩窟を一丈四方程に据り、内に牡丹唐草を胡粉にて渥く置き上げて彩色したり、窟中に石塔二基あり、一は實朝の塔と傳へ、一は二位禪尼の塔と云ふ、東鑑に據るに、實朝事ありし後、勝長壽院の側に葬ると見ゆ、さては當時開山榮西、二祖行勇、みな實朝歸依の僧なれば、此にも冥福の爲に建しものか。

御用邸

往昔千葉常胤、上總介直方、諏訪氏等の邸宅のあつた處である。御用邸は明治三十二年に竣工し、常磐木の間から御殿のさまがちら〳〵と仰がれる。

由比ケ濱

驛の南七丁。鶴岡八幡宮の大華表から凡そ五丁、東は小坪を遮る飯島崎、西は稻村崎に連る靈山ケ崎に涉れる一帶、二十丁に亘る砂濱の名稱である。滑川がその中を流れてゐる。白砂青松、西には稻村ケ崎、東には逗子葉山から遠く三浦郡の砂岸を望み、眺望絶佳である。別莊並びに海水浴旅館等が軒を連ねてゐる。この濱には古來多くの悲喜劇が演ぜられたことが歷史に見えてゐる。治承の昔、三浦氏が石橋山の賴朝を援けんとして及ばず、引返す途上、畠山重忠の軍と戰つて之を破つたのも此處である。建久四年八月、賴朝が千羽の鶴を放つたといふのも此の濱である。靜御前が生んだ義經の子を奪つて海に沈めたと云はれてゐるのも此の濱である。北條勢が斷末魔の勇を鼓して、潮の如く雪崩れこむで來た新田勢を喰ひ止めんとしたのも此の濱であつた。鎌倉幕府の時代には賴朝も爾後の代々の將軍も此地に於て武藝を練習したことが傳へられてゐる。

東鑑——仁治二年四月三日、西風、由比浦大鳥居内拜殿、被引潮流失、著岸船十餘艘破損、弘長三年八月十四日、自朝天陰雨降、雷鳴數多、則南風烈、雨脚彌甚、午尅大風拔樹、民居大略無全所、由比濱著岸船數十艘、被損漂沒、廿七日申尅以後、風雨入夜大風、由比浦船舶沒、彼死人寄汀、彼是不可勝計。

遊相記事——謁八幡廟、登樓門俯眺、一路如髮、直走由比濱、海光射欄、可想浙江樓也、爽路種松、距海三里、其間舊道三華表、其一今在海中、退潮之時、時見其嶺云、陵谷變遷、理或然也。

新編國志——由比浦大鳥居より波打際まで五町あり、此濱邊東は敷島、西は靈山崎、其間二十三四町あり、或は由井、由居に作る。

新編風土記――由比濱、東鑑或は前濱とも記せり、坂之下村靈山崎より、材木座村飯島に至る迄の海濱を云ふ、東鑑、治承四年十月の條に「伊豫守頼義、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潛勸請石清水、度瑞離於當國由比卿」と載せたり(中略)延久二年正月、伊豆箱根二所精進として、在幕下濱邊に出て潮に浴す、此儀恒例となり、二所に參詣の度々、世々の將軍必爰に浴潮あり。

貞應海道記――湯井濱に落着休みて、此所をみれば、數百艘の舟ども綱をくさりて、大津のうらに似たり、千萬宇の宅軒をならべて、大淀のわたりに異ならず、御靈の鳥居の前に日をくらして後、若宮大路より宿所につきぬ。

新編國志――由比濱大鳥居の東南に、新居閻魔堂あり、建長寺に屬し、寺領三貫文を分配す、舊寺號を圓應と云ひ、建長二年の造立とぞ、閻王像の腹中に紀文一紙ありて、永正十七年再興のよしを云へり、鎌倉年中行事曰、七月十六日、濱の新居閻王寺、應永大亂の時、亡魂御弔のため修法あり。

新編風土記――新居閻魔堂、今山内村小袋坂の南邊に移せり、貞享の鎌倉志に、由比濱に系けたれば、その後に移せるなり。

人類學雜誌――明治三十年、由比濱に新道を開くとて、古塚を穿ちて大偶を得たり、采女塚と稱し、裁許橋より西南、飢渇畠の四辻より猶西南にて、海濱院の背にあたる、土偶三躰、土馬一躰を得しなれど、破碎して完からず、而も頭髪の結樣、顔面の着朱、耳環、曲玉の頸飾り、手腕の釧環、腰帶、弦卷袋、及び馬に鐸鈴を着けて、輪鐙をさげ、鞍を負はせたるなど、徵古の益多かりしとぞ。

長谷觀音

長谷市街突き當りの山腹にある、驛から西南凡そ十八町、海光山長谷寺と號し、阪東巡禮第四の札所であつて光明寺の末寺である。背後に觀音山を負ひ、脚下に市街を俯瞰し、由比、葉山の長汀一眸の裡に鍾まり、風景絶佳である。本堂は藁葺屋根で間口十間、本尊は長二丈六尺の十一面觀音谷、佛工春日の作で和州豐山長谷寺の靈佛と同木異巧の作と稱せられてゐる。又堂内に安置されたる勢至の像は元と畠山重忠の持佛であつたのを、後世當寺に寄附したものと言はれてゐる。寺鐘に文永二年の銘があるから、本寺も多分その頃の創建であらう。此の鐘は、建長、圓覺兩寺の鐘と共に鎌倉三大古鐘と言はれ、錢を納めると寺僧は燈火を釣り上げて暗中の本會の佛體を拜觀させて呉れる。本會の燦爛たる黄金は足利尊氏の箔したものであり、後光は同義滿が作つたものと言はれてゐる。堂の左右に懸つてゐる懸佛は國寶である。寺寶が甚だ多い。此の本堂も大正大震災の厄を蒙り、目下改築中である。

光則寺

長谷寺の北に隣つてゐる。宿屋左衞門光則入道西信の宅址である。

光則は日蓮が龍の口にて首刎ねらるゝとき、其の門弟日朗日眞及び四條金吾父子等を預り、岩窟に押し籠めたが、後には日蓮の大信仰者となつた人である。

新編國志――宿屋は時頼の家臣、左衞門入道西信が宅地にて、昔日蓮龍ノ口にて首の座に及ぶ時、弟子日朗、日心、檀那四條金吾父子を安國寺にて召捕り、宿屋に預けらる、然るに日蓮不思議の奇瑞ありければ、宿屋入道も信を興し、吾宅を捨てて日朗に附す、日朗が土籠とて、寺の北の方の山上に在り。

日蓮化導記――文永五戊辰、自蒙古國可襲日本由有牒狀、就此牒狀、安國論符合之旨、以書狀、諫鎌倉殿、其御札云、去正嘉元年丁巳、八月廿三日、戌亥尅大地震、卽引諸經勘之、念佛宗釋宗等、有御歸依之故、日本國守護諸神善神、作瞋恚、所起災也、若無此對治者、可被破彼國之由、勘文一通撰之、正元二年庚申、七月十六日、奉付御邊、故最明寺入道殿進覽之、其後經九箇年、今年大蒙古國牒狀有之由、風聞頻、云々、如經文、自彼國責此國事、必定也、而日本國中、日蓮一人、當可爲調伏彼西戎之人、兼知之、將亦勘之、爲君爲國爲佛爲神、爲一切衆生、可被經内奏歟、委細旨者、遂見參可申候、恐惶謹言、八月廿一日、日蓮在判、宿屋左衞門入道殿。

大佛

長谷の電車停留場に下車して北へ三町ばかり、驛からは西南二十町、觀音堂の北六町、稻瀨川の源なる小溪谷、御輿嶽の西麓にある。大威山淨泉寺と

號し、淨土宗光明寺の末派である。明應四年由比ヶ濱の波浪襲來して堂を破壞して以來佛殿を設けず露佛である。長三丈五尺、膝囘り横五間半、腹の中に觀音六體、阿彌陀三尊を安置してゐる。傳ふる所によれば、聖武天皇國分寺の舊地を卜して大佛を建立せしめられ、又寛元元年長八丈の阿彌陀佛を安したが、二像共に顚倒頽廢して今の像は建長四年の鑄造に係るものゝ由である。之を奈良の大佛に比較すると大さきに於ては比較にならないけれども、其の圓滿なる慈顏溫容は天下一品と稱せられ、今は國寶に編入せられてゐる。

鎌倉や御佛なれど大佛はおはす夏木立かな

これは與謝野晶子の歌である。

再宿相之大佛寺　　釋義堂

早歲會遊瀨里子、羞將髮白對山蒼、寺瀨海岸吹松激、潮退灘沙送月長、去雁亡書家萬里、寒砧來夢楚三霜、客懷蕭颯秋風晚、儻爾園蔬小吐芳、(空華集)

東關紀行――由比の浦に阿彌陀の大佛造り奉ることの起を尋るに、本は遠江の國の人、定光上人といふものあ

り、過にし延應の比より、關東のたかき卑きを勸めて、佛像をつくり堂舍を建たり、その功すでに三が二におよぶ、烏瑟たかくあらはれ、半天の雲にいり、白毫あらたにみがきて、滿月の光を輝かす、佛はすなはち兩三年の功すみやかなり、堂は又十二樓のかまへ望むにたかし、彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作、金銅十丈餘の盧舍那佛なり、天竺震旦にもたぐひなき佛像とこそ聞ゆれ、此阿彌陀は八丈の御長なれば、かの大佛のなかばよりもすゝめり、金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりては是も不思議といひつべし。

鎌倉御靈社

驛から西南二十町、長谷觀音から二町、俗に權五郎社と云ひ、鎌倉平氏の祖、豪勇鎌倉權五郎景政の廟である。蓋し五郎と御靈と音の通ずる處から、昔から斯く呼ばれてゐる。景政は鎌倉郡を其領分としてゐたもので、後三年の役、源義家に從つて奥州に下向したとき歳十六にして膂力衆に優れ、鳥海の城攻の時敵のために左眼を射られたのを、その矢を拔かずして直ちに當の敵を射殺したといふのは有名な話である。大庭氏梶原氏などは皆其裔である。

林氏神社考——權五郎社、在鎌倉、五郎嘗赴奥州之役、矢中左眼不拔矢七日、遂射殺其敵、今世患眼者、祈此社、有効云。

保元物語——(義朝白河殿夜討の條)大橋平太、同三郎懸出名のりけるは、御先祖八幡殿、後三年の御合戰に、鳥海城を落されし時、生年十六歳にて、右の眼を射させ、其矢を拔ずして、答の矢に敵を射て、名を後代に揚げ、今は神と祝はれたる、鎌倉權五郎景政に、五代の末葉にて候……

東鑑——文治元年八月、御靈社鳴動、頗如地震、此事先々爲怪之由、景能驚申之、仍二品參給之處、寶殿左右扉破訖、爲解謝之、被奉納御願書一通之上、巫女等面々有賜物、被行御神樂之後、還御。……

星月夜井

驛の南西二十三町、極樂寺切通しに上る阪の右傍にある、鎌倉十井の一である。傳へ言ふ昔此の井戸に白晝尚ほ星の影を映じてゐたが、或時士人が誤つて井戸の中へ庖刀を墜したところ、爾來星の影が見えなくなつたと云はれてゐる。井戸の側に虚空藏堂がある、本尊は行基菩薩の作である。

新編國志——星月夜井は極樂寺の切通へ上る坂の下に在り、里老いふ、昔此井の中に星の影見えし故に名つく、後世菜刀を井へ落したるより、其影見えず、傍に星井寺虚空藏堂あり、其緣起に、天平中に、此井光あり、里民不思議に思ひ、是を視れば、井の邊に虚空藏の像現し玉へりとあり、後堀河百首常陸が歌「我獨鎌倉山を越え行けば星月夜こそうれしかりけれ」

北國紀行——極樂寺へ至る程にいと閑き山際に、星月夜と云所あり、昔此道に星御堂とて侍りきなど、古き僧

の申侍りしかば、歌に、今も尙星月夜こそのこるらめ寺なき谷の闇の燈

極樂寺坂

星月夜の井から西に進んだところ靈山崎の北にある山坂である。鎌倉の西境を限る山脈の、海中に斗出したところを中斷して作つたもので、極樂寺の門前から鎌倉に通ずる本街道である。此の街道は、鎌倉七切通中の最も重要なるものとせられ、極樂寺の忍性律師が開鑿したものと傳へられてゐる。

史學雜誌――元弘三年五月十八、濱手の大將大館宗氏は、稻村崎の干潮を利用して、稻瀨小前濱に押入る、而るに宗氏戰死し、濱手は滿潮となり、已を得ず極樂寺坂に退き、而して又之を失ひ、翌十九日には、義貞自ら將として極樂寺坂をとらんとしたるも遂げず、廿一日に至り、新田氏義大將として激戰し、闇夜に乘じて三木俊連搦手を陷れ、卒に極樂寺坂を取れり、而して之と同時に濱手又干潮となれり、新田勢の鎌倉に入るや、奔流の堤を決して平野に注ぐが如し、明くれば葛西ヶ谷の慘劇、是れ必然の果のみ。

梅松論――建武元年、關東に本間と澁谷が一族先代方として謀叛を興して、相模國より鎌倉へ寄來る間、澁川刑部大輔義季を大將として、極樂寺の前に馳向て、攻戰ふこと數刻なりしに兒徒打負けたり。

極樂寺

極樂寺坂を下りて少許、突當りに小さな山門をもつた一寺がある、極樂寺又は靈山寺と號し、靈鷲山感應院とも言はれてゐる。奈良西大寺の末寺で眞言

律宗、草創は北條陸奥守重時、開山は忍性律師である。北條經時の子長時が大いに殿堂を修めて輪奐の美を極め、四十九の支院を有する大刹であつたが、屢〻兵燹の厄に遭ひ漸次衰頽して今は僅かに吉祥院のみが存してゐる。寺後の山に重時の墓がある。此寺には寺寶極めて多く、本尊の釋迦牟尼如來の立像は興正菩薩の作で名高く、其他毘首羯摩作の十大弟子像、善慶作の轉法輪釋迦牟尼如來を始めとして、金銀五鈷鈴、金銀三鈷鈴及び忍性の畫像などがある。境內の西の方に月影が谷といふ所がある。昔冷泉爲相卿の母阿佛尼（爲家の妻）が京都から鎌倉に下り、此の處に住んで十六夜日記を書いたといふので名高い。十六夜日記に「あづまに住む處は月影ヶ谷とぞ云ふなる、浦近き山もとにて、風いと荒し、山寺の傍なれば、のどかにすごして浪の音松風たえず」とあるのは此處のことである。これも大正大震災に潰れた。

新編國志――極樂寺は陸奥守北條重時の創建にて、重時は世に極樂寺殿觀覺とも云へり、東鑑に弘長元年十一月三日、寅一點、入道重時卒、年六十四、于時住極樂寺別業、自發病之始、拋萬事、一心念佛、住正念取云

云。

釋書――忍性入相陽、止清涼寺、平副帥時頼、嚮性淳譽、創光泉寺、而居焉、武州刺史平長時、欽性律行、新極樂寺延之、性移焉、初正嘉中、有沙門營一宇、安丈六彌陀像、名曰極樂寺、未落而亡、武州之父長時、遷其宇于今地、爲齋場、至此武州與其弟業時、戮力修營、成巨刹、嘉元元年七月、性逝、壽八十七。又云、了然、號月號、正嘉之元住相之極樂寺、臨修偈曰、七十一年、夜夢紛然、一旦覺來有何事、水在澄潭月在天。

新編風土記――當寺緣起曰、正元元年、請常州淸涼院良觀上人、上人答曰、自是當西南而曰地獄谷、有瀧池、可定此地乎、上人到于彼谷、念誦暫時、有感應、創建七堂迦藍、就于文應元年、其餘七七四十九院建云、云々、

日蓮袈裟掛松

極樂寺の前を流るゝ極樂寺川に添ふて三町ばかり南へ行くと小さな橋がある。之れは針磨橋といつて鎌倉十橋の一である。これを渡つて二町ばかり行けば、民家の裏手の小高い處に、法華經の題目を刻んだ石碑を覆ふて、一本の老松がある。日蓮上人が斬首の刑に處せらるべく龍の口へ行かれるときに身に着けてゐた袈裟をば此の松の枝へかけて往かれた、といふので日蓮袈裟掛の松と呼ばれてゐる。今の松は其の時の松ではあるまい。此の處から少し行くと左の方に大館宗氏主從十一人の墓と刻んだ石標がある。宗氏は新田方の勇將で、由比ヶ濱手攻入りの大將であつたが、稻瀨の川尻のところで討死したのである。

稻村崎

七里濱の東、坂ノ下の南、海中へ斗出した岬角の名である。此地は北方に靈山ヶ崎、極樂寺坂、長谷山等の丘陵起伏し、前は渺茫たる滄海を望み、海濱には奇石怪岩突兀として起伏し、西は七里ヶ濱の沙濱を經て江ノ島と相對し、近傍には別墅多く、風景頗る秀麗である。其西に稻を積んだやうな形の岡阜があるので稻村ヶ崎と呼ばれたのであらう。元弘三年五月廿一日新田義貞此處に進軍したが、懸崖直ちに海に迫り、道狹くして容易に進攻し難きを知り、金裝の佩刀を海に投じて退潮を龍神に祈つた舊趾である。昔は一條の砂濱があつて、鎌倉に出入の大路であつたのが、いつしか今のやうに崖の下に深淵をなして、干潮にも通じなくなつたものである。

稻叢崎

海波可狂潮可怒、其奈洶湧呑沙步、左將心膽貫精誠、便投一劒感神明、波恬潮退乾沙石、施斧披靡十萬兵、

落合雙石

勤王義勇倍奮發、提戈疾躍擣巢窟、倏起東風助忠讜、烟焰漲天更蓬勃、休怪血肉火中殲、久因人熱放猛炎、累鯨安能脫天網、猶幸屠腹歸泉壤、暮山雲集天沈陰、時有群鬼哭林莽、嗚呼片言可以醒萬也、專則人鑑侈日鑑

太平記――(弘元三年五月二十一日の夜半ばかりに、新田義貞)片瀬腰越を打廻り、極樂寺坂へと打莅み給ふ。明け行く月に敵の陣を見給へば、北は切通迄山高く道嶮しきに木戸を搆へ、垣楯を搔きて數萬の兵陣を双べて並居たり。南は稻村ケ崎にて、沙頭路狹きに浪の打際迄逆木をひし〳〵ひきかけ、澳四五町が程に大船ども並べ、矢倉をかきて横矢に射んと搆へたり。義貞龍神に向ひて祈願し、自ら佩き給へる黃金作の大刀を拔きとりて海中に投げ給ふ。眞に龍神受納やし給ひけん、其夜の月の入る方に前々更に干る事もなかりける稻村ケ崎俄かに二十町餘り干上りて、平沙渺々なり、横矢射んと搆へし船共落ち行く潮に誘はれて遙かに沖へ漂へり。不思議といふも類なし。義貞之を見給ふて六萬餘騎を一手になし稻村崎の遠干潟を眞一文字にかけ通りて鎌倉中に亂れ入る。

新編風土記――稻村ケ崎は海岸に突出して、其形稻を積たる如し、故に名くと云ふ、高三十間、東面を靈山崎と唱へ、西面を稻村崎と呼ぶ。石橋山の役に、和田義盛宮所を過て、酒匂驛に至れり。

保曆間記――建久九年の冬、右大將殿相模河の橋供養に出で、還給ひけるに、稻村崎の海上に、十歲許なる童子現れ給ひて、汝を此程隨分愍びつるに今日こそ見つけたれ、我を誰とか見る、文治に沈し安德天皇なりと

梅松論――五月十八日未刻、義貞勢已に稻村崎を經て、前濱の在家を燒拂ふ煙見えければ、鎌倉中のさわぎ、手足の置所なく、あわてふためきける有樣、譬へていはんかたぞなき、高時の家人諏訪長崎以下の輩、身命を捨て防ぎ戰ひける程に、當日の濱の手の大將大館をも、稻瀨川に於て討取、其手引退て靈山の頂に陣を取、同十八日より二十二日に至るまで、鎌倉中の口々、合戰のこゑ矢呼び、人馬の足音暫も止時なし、相模守高時禪門、元弘三年五月二十二日、葛西谷に於て自害、一類も同數百人、自害するこそあれなれ、爰にふしぎなりしは、稻村崎の浪打際、石高く道細くして、軍勢の通路難儀の所に俄に鹽干て、合戰の間干潟にて有し事、かた〳〵佛神の加護とぞ人申ける。然間に、鎌倉は南の方は海にて、三方は山なり、嶺つゞきに寄手の大勢陣を取て、麓におり下り、所々の在家に火を放ちしに、いづかたの風もみな鎌倉に吹入て、殘所なくこそ燒はらはれける。

新編國志――稻村崎わたりの濱邊を横手原と云ひ、新田義貞鎌倉亂入の時「あけゆく月に敵の陣を見給へば云々とあるは、此なるべし」と述ぶ。極樂寺聖福寺の兩谷の南なる海濱歟、詩人の「府中壯士盡歸死、海底老龍空自神」と云ふも、此間の感興なり。

靈山崎

稻村崎の北東に連なり、極樂寺坂に至る丘陵である。高さ八十三米突、梅松論に靈山の頂に陣取るとあるのは此崎の山の上を言つたものである。

七里濱

鎌倉稻村崎から腰越に至る海濱の名であつて、眺望極めて快豁、

長汀の西端海中には江の島が繪の如く碧波に浮んでゐる。遙かに沖の方霞を隔てゝ伊豆大島の島影をも望み得べく、背後の雲表に富嶽を仰ぐ光景は誠に形容の言葉がないほどの美觀である。此の濱は寶德二年四月、足利成氏が兩上杉氏と鎬を削つた古戰場である。その長汀が關東道の七里(六町一里)に當るから此名があるといふことである。道の北端に日蓮袈裟掛の松があり、又途中に行逢川がある。此の川は、日蓮上人龍ノ口で遭難の時、奇瑞多きため、其旨を鎌倉へ注進する使者と、時頼が遣はしたる赦免の使者とが此の川のところで行逢つたから斯く名づけられたのである。

鎌倉大草紙——應永十七年、新田殿の嫡孫謀反を起し、廻文を以て便宜の軍兵を被催ければ、鎌倉殿の侍所千葉介兼胤、生捕にして七里ヶ濱にて打てける、又云、成氏の出頭人共色々上杉を妨げる間、太田備中守、長尾左衞門尉、寶德二年卯月二十一日、鎌倉の御所へ押寄、成氏は江の島へ遁れ陣取給ふ、太田長尾腰越迄寄來りける、小山下野守七里灘にて馳向ひ、防ぎ戰けるが、小勢にて家子郎等八十餘人討死して、其身も手負引退く。

腰越

鎌倉驛から二里、七里濱の西端にある、文治元年源義經平家の一門を西海壇ノ浦に滅盡し、宗盛以下の捕虜を引きて鎌倉に入らんとし、此の地まで來たとき、奸臣の讒によつて兄頼朝之れを許さず。淹留數日痛恨極りなく、一書を草して大江廣元に訴ふる處あつたが、廣元が之に答へなかつたので、消然として西に去つたところである。世に所謂腰越狀なるものは武藏坊辨慶が、附近の萬福寺に於て起草したと言はれてゐる。又五年の後、卽ち文治五年には義經の首級を此の地に於て實檢せしめたことが盛衰記に載つてゐる。延元元年十二月、北畠顯家が義良親王を奉じて足利氏の軍を破つたのも此の地である。腰越の浦邊の磯山を小動(古由留義)と云ひ、其の海崖は斷崖そばだちて、奇景を呈してゐる。

義經腰越狀

義經征討の勞に代り上は國賊を夷げ、下は家恥を雪ぐ、心竊に褒賞を期す、圖らざりき忽ち讒を蒙り日をこゝに曠くせんとは、以て自ら明にする莫く徒に涕泣するのみ、將に恩顧に違ひて骨肉の誼絶えんとす、先人の再生に非ざるよりは誰か分疏せん、義經幼にして孤、母に從ひて逃匿し、諸國に流寓して諜隷の役する所となり、未だ一日も安居せず、然り而して幸慶忽ち會し重任を忝ふするに至る。或は馬を峻坂に笞ち、或は

風を大海に凌ぎ敢て軀命を顧みず、以て寃魂を慰め宿憤を伸べんと欲す、尙他あらんや、既に五位尉を辱くす榮顯何をか加へん、而して忽ち此厄に遭ふ憂深く悲切なり。敢て誓書を上りて之を百神に要す、而して威猶彝れず、公の救護を仰がざるを得ず、伏して願はくは間に乘じて進み說かれんことを、庶幾はくは其他意なきを亮にして、卒に恩宿を蒙り終身の安を享くることを得ん。

東鑑――源廷尉義經、如意平朝敵訖、剩相具前內府參上、其賞兼不綻之處、日來依有不義之聞、忽蒙御氣色、不被入鎌倉中、於腰越驛、徒涉日之間、愁歎之餘、付因幡前司廣元、奉一通款狀、廣元雖披見之、敢無分明仰、追可左右之由云々。

春夢雜中紀行――抵腰越、其左高巖枕海者、爲小餘綾、右旋入漁村、過滿願寺、相傳、源義經滅平氏、執宗盛以歸、及至此、賴朝禦之、不得入鎌倉、乃貽江廣元書、以訴其寃使辨慶草之、此其所也、蓋故驛舍、而後爲寺也、辨慶之草今藏在本寺云、余素聞知其贋矣、故不請覽之。

滿願寺

鎌倉から七里濱を經て江ノ島に至る途中、腰越津村大字腰越に在る、龍護山と號す。行基菩薩の開山で、弘法大師の作つたといふ不動や十一面觀世音などを藏してゐる。庭に硯の池といふのがある。武藏坊辨慶が腰越狀を草する時、硯の水を汲んだ池だと云はれてゐる、池の畔に辨慶腰掛石といふのがある。

片瀨

川口村にある、藤澤驛の南一里、藤澤からと鎌倉からとの電車が此處に落合つてゐる、腰越に續いた村で、片瀨川の對岸は鵠沼の海濱である。町の中頃、海に面した華表は江の島辨財天の表口で、其の處から海岸の砂洲に出れば、虹の如き長橋によつて江の島に渡るやうになつてゐる。貝細工其他の土產物店が並んでゐる、近年夏期は海水沿客によつて賑ふやうになつた。

新編國志――東鑑に鎌倉四境の一を固瀨と云ひ、小驛なり、建保六年の條に「勅使歸洛、李部并大夫判官行村、左衞門尉朝政、爲送之、到固瀨驛」とある是也、太平記に、新田義貞逞兵二萬餘騎を卒して、片瀨腰越を打廻り、極樂寺坂へ打廻り給ふとあるも、此道なり。鶴岡八幡一鳥居まで六十町、片瀨村の東の原を唐原といふ。

片瀨川

一名田倉川と云ひ又、境川、川名川の古名もある。片瀨村を貫流する小さな川であるけれども鎌倉の西境にあるので古來歌などに讀まれたことも少なくない。中務宗尊親王が文永三年七月將軍の職を罷められ歸洛の時に「歸り來て又見んことも固瀨川澄れる水のすまぬ世なれば」の一首を詠じたのが夫木集に載つてゐる。

また同じ夫木集に參議爲相の歌がある。

打渡す今や汐干の固瀬川思ひしよりは淺き水哉

辰の口

川口村片瀬にあり、鎌倉幕府の刑場である。日蓮上人が法華經の功德によつて斬首を免れしも此の地であり、建治元年九月蒙古使者杜世忠以下五人を刑したのも此地である。日蓮奇蹟の趾に建てられたのが今の龍口寺である。境内には厄難の當時設けられたといふ日蓮の士牢があり、堂内には日蓮が座に直つたときの敷石がある。法華信者の賽者年中絶えず、特に九月十一、十二日の會式には參詣者が雲集する。

北條九代記――建治元年元使五人被召下關東、九月七日、於龍口刎首、中散大夫禮部侍郎杜世忠、奉訓大夫兵部郎中河文著、承仕郎回々都魯丁、書狀官董衣國人果、高麗譯語郎將徐贊、今度刎首事、永絶窺窬、不可攻之策也、其後警固事、有沙汰鎭西、撰補守護人器用、發遣海邊國々、止京都大番役、被差置在京人、公家武家減省公事、行儉約、休民庶、皆是爲軍旅用意也、

保曆間記――建治元年四月十五日、大元使長門國室ノ津の浦に付く、八月件の新使五人關東へ召下され、九月七日龍ノ口にて首をはねらる。

龍口寺

川口村大字片瀬ノ内龍ノ口にあり。法華宗であつて寂光山と號す、弘安年間日蓮の弟子日法以下六老僧が協力して創建したものである。寺域二千二百九十八坪、日蓮龍ノ口の御難の舊蹟に當り、本堂に安置されたる本尊は日法作長二尺二分の祖師日蓮像である。

註書註――文永八年九月十二日、爲副元帥平時宗之使者、賴綱已下數百人武士等、來名越小庵、搦取聖人、申尅終出鎌倉、日中渡小路、漸至龍口之海邊、兵士打圍、子尅坐于敷皮、向南方合掌……

江の島

片瀬の前方海中に點在せる一孤島である。昔は舟で渡つてゐたのであるが、建保四年正月の干汐の時に始めて陸に續いて干潟となり、その時以來干汐の時は徒歩にて渉れるやうになつたといはれてゐる。島には片瀬から一條の粗末な棧橋を通じてゐる。島は周圍二十町、面積十八町歩、全島皆岩石で、斷崖絶壁を廻らした丘上には靑樹蒼欝、見渡せば西には箱根から天城に連なれる山々屏風の如く、西北

には富士の秀峰群山を壓して碧空に聳え、東の方は逗子葉山から三崎へかけての長汀曲浦岬角繪の如く、南は浩瀚萬波の彼方に伊豆大島三原山の噴烟をも望み得べく、東海無双の勝景である。棧橋を渡り華表を過ぐれば、旅館料理店其他名物貝細工や榮螺の壺燒を鬻ぐ店が、道の兩側坂路に沿ふて層々と耀り上り一種の奇觀を呈してゐる。此の島は大古は八王子山小動岩と續いてゐたものであるが、それが波濤に浚はれて今日の如く切れたものであると學者は言ふのである。「以前は無人島であつたが、文武天皇の四年に役小角が始めて此島に渡つたと言はれてゐる。その後文覺上人が、源頼朝の命によりて此島の西の岩窟に辨財天を勸請したと傳へられてゐる。近江の竹生島と安藝の嚴島と此島を合せて日本三辨天と崇められて有名である。また島の上に三つの祠がある。邊津の宮、中津の宮、奥津の宮と號し、多紀津姫命、市杵島姫命、多紀理姫命の三女神を祭り、此の三つを總稱して江之島神社と呼ばれてゐるが、實は金龜山興願寺といふのである。邊津の宮の背後に一基の古碑がある。宋良眞が宗から其石を持つ

て來たものであつて、高さ五尺、幅二尺七寸ばかり、碑面は磨滅して僅かに篆額の大日本江島靈跡建寺之記の數文字を讀み得るばかりである。又奥津の宮を西に下り崖に沿ふて左折すれば龍穴の前に出られる。洞穴の口は南に面して開き、濶さ方一丈餘、入口に棧道を架し、洞内に入る人の爲めに蠟燭など賣つてゐる。是れ古への窟辨天であつて、窟中に入ること約四十間にして道は左右に岐れ、一を貽藏界と呼び、他を金剛界と呼ぶ。奥に兩部の大日如來を安置し、これから奥は洞窟愈々窄くなつて匍匐して這入るのであるが、遂に奥を極めることが出來ない」。洞窟の南端兒ヶ淵は、昔鎌倉建長寺の僧、奥州信夫の人自休といふもの、江の島岩本院の稚兒白菊に懸想し、再三之を挑んだので、白菊窮した揚句

白菊をしのぶの里の人とはゞ思ひ入江の島とこたへよ

うきことを思ひ入江の島かけに捨る命は波の下草

二首の歌を殘して此淵に投じて死んだ、自休悲歎に堪えず。

白菊の花の情の深き海に共に入江の島ぞうれしき

の一首を止めて亦相尋いで投身したので爾來此の淵を兒ケ淵と名づけたのであると、

波すゞし江の島うかぶ青疊　也有

江の島へ女の旅や春の海　子規

澤旭山鎌倉遊記――靈龜負蓬萊而浮耶、望之維石瑰瑋、琪樹錯綜、樓臺雜比、恍然爲不可也爾、日將虞淵、不風而浪、騰涌澎湃、礁上濺擊、不可舟也、舟人肩我以厲揭焉、驚濤人立而席卷、將沒者數、作氣狂呼、氣更豁然、相與稱快、其津凡二里許、既上岸、則民屋鱗次、雜沓喧嘩、嚮所望何在、此夕遂宿島中、海鮮之膳特美。

新編風土記――江島へは退潮の頃は徒行して到る、潮盈れば船を用ひ、或は背負て渉れり、此間一町餘あり、里俗負越場と呼ぶ、昔は、建保四年正月、潮退きて始て陸地に續きければ、希代の神威なりとて、參詣の僧俗舟の煩なく群參せしとぞ、江島緣起曰「奇岩怪石の磊磈たる、異島廻穴の幽深なる、百尺の山天に挿み、三臺の島波に戴く、白雲の破ところ洞門開けて翠屏あらはれ、黑水の澄とき潭底透て素練濃なり」

東鑑――建保四年正月十五日、江島明神有詑宣、大海忽變通路、仍參詣之人、無船煩、始自鎌倉、國中縞素上下、成群、誠以末代稀有神變也、三浦右衞門尉義村、爲御使、向其靈地、令參、嚴重之由申之。

貞應二年海道記――固瀨川をわたりて、江尻の海汀をすぐれば、江の中に一峰の孤山あり、孤山に靈社あり、江島大明神と申す、威驗殊にあらはにして、御前を過る下り船は、上分を奉る、法師はまいらぬときけば、其

こゝろを尋ねるに、昔此邊の山寺に禪僧有て、法華經を讀誦して、夜をあかし日をくらす、其時女の形出來て、夜毎に聽聞して失せぬれば、其行方をしらず、僧これを怪みて、絲を構て密に裾につきにけり、あくる朝に糸をたゞして見れば、海上にひかれてかの山にいたりぬ、岩穴に入りて龍尾につけたり、神龍顯形して後、僧にはぢてこれを入れずと云へり、夫權現は利生の委なり、化現せば何ぞ委には憚らむ、弘經は讀誦の僧なり、經を貴まば何ぞ僧を厭はんや、深き誓ひは海に滿てり、波に垂るゝ跡、雲にひゞく聲、されどゝ神慮は人知らず、きれが習はしに從ひて伏し拜みて通りぬ。

江のしまやさして鹽路に跡垂るゝ神は誓の深きなるべし

林氏神社考――江島、一作榎島、又茫島、元和元年冬、赴江戸、路宿于藤澤、江島距此四五十町、余以近公之暇往江島、島距陸數町、借一葉之舟、而航之、島中小屋數十間、大率漁人也、已而進步、有寺、是辨財天也、行數町、到于上、又下行數百步、舉目大洋也、循岩而步海岩以下、西南行數十步、有窟、窟前海水激入、其形如池、湛而漣漪、其側壁高數丈、傍壁斜身而入、數十步、有小祠、曰島神矣、窟高仰而見之、殆岌々乎、有鴿數飛來飛去、翔于窟宇縫之間、取松明、自祠後直入、脚下水瀑、或蹈砂石、或履尖岩、或踐柔滑之磐石、石坳有水、水煖而清、往々在焉、其前有兩岐、聞昔役行者在伊豆島時。來此出入窟中云、余行殆一町許、而窟甚狹、人告余曰、窟極于此、自是而出、誠是也、龍神之所栖也。

湘中紀行――龍穴、傳道昔者有龍出焉、而島故爲天女所棲止、自弘法祀天女於此、後人遂以爲天女窟宅、鎌倉盛時、雩必於是、事見東鑑、余嘗聞之、凡瀕海諸州、山根往々有穴、皆上世因鬬金鐵而成者也、則此穴亦焉

54
29.

知其猶不然哉、但人神之而神、人異之而異、神異可以以己矣、又以爲石佛之肆何哉。

神社考――平時政嘗詣榎島、祈子孫蕃榮之事、然一美婦綠衣朱袴、來告曰、汝後胤必執國權、若其無道、七世有失、時致驚而見之、大蛇長可二十丈、入海中、護其所遺鱗三枚、所謂三鱗形紋是也。

新編風土記――金窟(緣起)、安然記曰、島西南之岸、有巖窟、自窟中時放金光、是故名金窟)、龍穴(東鑑)、蓬萊窟(北國紀行曰、西方の渚近く下りて、遙なる岩屋あり、內に兩界の垂跡、功德天まします、卽爰なも蓬萊洞といへる神秘ありと聞ゆ)など稱し、天女初て垂跡の神窟なり、因て之を本宮とす、卽奥院なり。

光觸寺

十二郷谷の中央にあたり、鶴岡から凡そ廿五町、五大堂の正東五町許、時宗の彌陀堂である。本堂の額は後醍醐天皇の宸筆で、彌陀緣起の繪卷が國寶になつてゐる。本尊を頰燒彌陀と呼ばれてゐる。

新編風土記――文和四年緣起曰、京都に大佛師有、雲慶法印と號す、將軍右大臣家の招請に因て下向の刻、鎌倉の住人すくりの氏女町の局、雲慶に對面して、此佛を作らしむ、來迎の三尊、長は法の三尺なり、爰に萬歲法師と云し下法師あり、妄語偸盜人を煩はしむ、氏女怒て左の頰に火印をさす、退て見れば火痕なし、本尊を見るに火印の痕あり、此奇異に驚て、田代の阿闍梨に寺地を請て、比企谷に岩藏寺と號し一宇を建立し、本尊を安置す、世に之をかなやき堂と云ふ、萬歲は後に大磯に菴を結び、彌々專修念佛し、名號を書き商なふて、大往生を遂畢ぬと、云々。

旅杖の痕

海道記――源光行

固瀨川を渡りて、江尻の海汀をすぐれば、江の中に一峰の孤山あり。孤山に靈社あり。江尻大明神と申す。威驗ことにあらたにして、御前を通り下る船は上分を奉る。法師は參らぬと聞けば、その心を尋ぬるに、むかし此邊の山寺に禪僧有て、法華經を讀誦して、夜をあかし日をくらす。其時女の形出來りて、夜毎に聽聞して、あくれば忽然としてうせぬれば、其行方をしらず。僧これを怪しみて糸を構へて密に裾につけにけり。あくる朝に糸をたどしてみれば、海上に引かれてかの山にいたりぬ。巖穴に入て龍尾につけたり。神龍顯形して後。僧に恥ぢてこれを入れずといへり。それ權現は利生の姿なり。化現せば何ぞ姿にはゞからん。弘經は讀誦の僧なり。經を貴まば何ぞ僧を厭はんや。深き誓ひは海に滿てり。波に垂るゝ跡は。

549
293

恐躰は天に知れたり。雲にひゞく聲、されども神慮は人しらず。きねがならはしに從ひて、ふし拜みてとほりぬ。

江のしまやさして鹽路に跡たるゝ神はちかひのふかきなるべし

路の池に高き山あり。山の峰禿にて、貴からずといへ共。惟石ならびて興なきにあらず。歩みをおさへて石を見れば、昔かの堀穿ちたる磐どもなり。海も久しくなれば、干るやらんと見ゆ。腰越といふ平山のあはひを過れば、稻村といふ所あり。さかしき岩の重なり臥せる濱をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる浪の、花の如くにちりかゝる。

うき身をばうらみて袖をぬらすともさしもや波にこゝろくだかん

申の刻に湯井の濱に落着きぬ。しばらく休みて此所をみれば、數百艘の舟ども綱をくさりて、大浦の浦に似たり。千萬宇の宅軒をならべて、大淀のわたりに異ならず。御靈の鳥居の前に日をくらして後、若宮大路より宿所につきぬ。月さしのぼりて、夜も半に更にければ、おきたる老人おぼつかなくおぼえて、

都には日をまつ人をおもひおきてあづまの空に月を見るかな

鷄明八聲のあかつき、旅宿一寢の夢さめて、出立見れば月の光屋上の西に傾きぬ。

おもひやる都はにしにあり明の月かたぶけばいとゞこひしき

十八日、此宿の南の軒端に高き丸山あり。山の下に細き小川あり。峰のあらし聲落ちて、夕の袖をひるがへし、灣水ひゞきそゝぎて夜の夢をあらふ。年頃ゆかしかりつる所か、いつしか周覽相催ほし侍れども、未だ旅なれば、今日は空しく暮しつ、相知りたる人は一兩人侍るを、賴みて物など申さんと思ふほどに、たがひてなければ、いとゞたよりなくて、

たのめつる人はなぎさのかたつ貝あはぬにつけて身をうらみつゝ

さらぬ人は多けれども、うとければ物いはず、其中にふるき得意一人ありて、不慮の面談をとゞ。往事の夢に似たる事を憐みて、次に昔に變る事を歎く。互に心懷を述べ

549
293

て暫く相語る。其後立出て見れば、此所の景趣は海あり山あり、水木たよりあり、廣きにもあらず狹きにもあらず。街衢のちまたは方々に通ぜり。實に此聚同じ邑をなす。鄉里都を論じて望まづ珍らしく、豪を選び賢をえらぶ。門槨しきみをならべて地又賑へり。おろ〳〵將軍の貴居を垣間見れば、花堂高くおしひらいて、翠簾の色喜氣をふくみ、朱欄妙にかまへて、玉砌の石ずゑ光をみがく。春にあへる鶯の聲は、好客堂上の花にあざけり。あしたをおくる龍蹄は、參會門前の市に嘶ゆ。論ぜず。本より春日山より出たれば、貴光たかく照して萬人みな瞻仰士風塵をはらふ。威驗遠く誡めて、四方こと〳〵く聞きにおそる。何ぞ況んや。舊水源すみまさりて。清流いよ〳〵遺跡をうるほし、新花榮鮮にひらけて、紫藤はるかに萬歳をちぎる。凡そ座制を帷帳の中に廻して、徵集郡國の間につゞめたり。しかのみならず、家室は扃をわすれて夜の戸をおしひらき、人倫は心を調てほこるともほこらず。惠政の至り治まりてみゆ。

夜の戸ものどけき宿にひらくかなくもらぬ月のさすにまかせて

此緣邊に付て、おろ〳〵歷覽すれば、東南の角一道は、舟檝の津、商賣の商人、百族にぎはひ、東西北の三方も、高卑の山屏風の如くに立廻りて所をかざれり。南の山の麓に行て、大御堂新御堂を拜すれば、佛像烏瑟のひかり、瓔珞眼にかゝやき、月殿書梁のよそほひは、金銀色をあらそふ。次に東山の裾にのぞみて、二階堂を禮す。是も餘堂の踔躒して、感歎及びがたし。第一第二の重檐には、玉のかはら鴛の翅をとばし、兩目兩足のならびたまへし臺は、金の磐鶴燈をかゝげたり。大方魯般意窮めて、成風天に望むにすゞしく、毗首手功をつくせり。發露人の心に催ほす。見れば又山に曲木あり。庭に恠石あり。地形のすぐれたる佛堂と云つべし。三壺雲に浮べり、七萬里の浪池邊によせ、五城霞に峙てり。十二樓の風、階の上にふく。誤まりて、半日の客たり。疑ふらくは七世の孫に逢はん事を。夕に及んで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にまゐらず。朱の玉垣金鏡に映じ、白妙の錦弊風によそめき。銀の鐺は朱檻をみがく。錦のつづれは花にひるがへる。しばらく法施奉りて、瑞籬に候すれば、神女がうたの曲

549
293

は、權現垂跡の隱敎にかなひ、僧侶の經のこゑは、衆生成道の因緣を伸ぶ。彼の法性の雲の上に、寂光の月老たりといへども、若宮の林の間に、應身の風あふぎてあらたなり。

雲のうへにくもらぬかげをおもへどもくもりしたにくもる月かな

月の光にたゝずみて、石屋堂の山の木末はるかに眺めて、いぶせく歸りぬ。適(たまたま)の下向なれば、遊覽の心ざし切々なれども、經廻わづか一句にして、上洛すでに五更になりぬれば、名殘のむしろをまきて、出なん事を急ぐ。時に晩鐘のうち驚かせば、永しと思ひつる夏の日も、今日はあへなく暮ぬ。一樹の蔭の宿緣淺からず、拾謁のむつび芳約深き人あり。

きてもとへけふばかりなくたびごろもあすは都にたちかへりなん

返し

たびごろもなれきてをしき名殘にはかへらぬ袖もうらみをぞする

五月のみじか夜。時鳥の一聲の間にあけなんとすれば、菖蒲の一夜のまくら、再會不定のちぎりを結びて出ぬ。

かりぶしのまくらなりとてあやめ草一よのちぎりおもひわするな

湯井の濱を歸りゆけば、浪のおもかげ立そひて、野にも山にも離れがたき心ちして

なれにけりかへる濱路にみつしほのさすがなごりにぬるゝ袖かな

回國雜記—准后道興

鎌倉中、あなたこなたを順見し侍りて、先づ谷々を人に尋ね侍り、龜がゐの谷にてよめる。

いくちとせ鶴が岡べにともなひてよはひ爭ふ龜がゐのやつ

扇が谷にて

秋だにもいとひし風を折しもあれ扇がやつは名さへすさまじ

うつし繪の扇がやつや是れならん月はうなばら雪はふじのね

さゝめがやつ

549
293

霜さやぐさゞめがやつのふじの間に一夜のゆめも嵐ふくなり

梅ヶ谷

冬がれの木立さびしきうめがやつ紅葉も花もおもかげぞなき

うりが谷

ひと夏はとなりかくなり暮過ぎて冬にかゝれるうりが谷かな

霧がやつ

此の里のふる井のもとの桐がやつおちばの後はくむ人もなし

胡桃が谷

住なれしかまくら山のやまがらやくるみが谷に秋をへぬらん

べにが谷を通りて、化粧坂を越えんとて、俳諧

かほにぬる紅が谷よりうつりきてはやくも越る化粧ざかかな

鶴が岡の八幡宮に參詣し侍れば、傳へ聞きしに勝れたる宮だちなり。誠に信心肝に銘

じて尊く覺え侍る。抑當社別當祖師隆辨僧正は、經歷年久し。その階弟道瑜准后は、號をば大如意寺といひ、兩代彼の職に補し侍りき。由緒無双なることを思ひ出して、神前に奉納の歌

神もわが昔しの風をわすれずばつるがをかべのまつと知らなん

由井が濱にまかりて、鳥居など見侍りて、暫く皆々あそび侍りけるに。

くち殘るとりゐのはしら現はれて由井の濱べに立てるしらなみ

この序に建長圓覺以下の五山を順見し侍りて、これより瀨戸金澤と云へる勝地の侍るを尋ね行くに、瀨戸の沖に漁舟あまた見えけるを。

よるべなき身のたぐひ哉なみあらきせどの汐合わたるふな人

丙辰紀行—林道春

鎌倉……鎌倉にいたりて、あなたこなた見ありき侍りしに、賴朝の墓とて人の教へければ、鴨の長明が草も木もなびきし秋の霜きへて、といへる事を思ひ出て。

549
293

滿目鎌倉城郭亡。雲烟漠々樹蒼々。逍遙昔聽遊龜谷。報賽今無詣鶴岡。草偃匣中三尺水。苔深墓上五更霜。君公不識企桑計。千載英雄淚濕裳。

江島　藤澤より馬にまたがり、海濱近き所にて、漁父の舟をかり、江島に渡りて見れば、あなたの海の岸の下に、大なる岩窟あり。たい松をともして、深く入るほどに百歩あまりにてやみぬ。むかし龍神の棲ける所となんいひ傳へる。この島の辨財天女は、世にかくれなき事なり。

借問島中人、不知此孰神、蜿々遺蹤在、君其問水濱。

江島從來神女居、風鬟霧鬢駕雲輿、遊人若有登仙意、水宿應傳柳毅書

神世いかに今むつましみわたつ海の八重の鹽路に言傳やらん

熱海紀行―横井也有

道すがら鎌倉に三夜ばかりおはして、寺社古跡ども御覽ず。隨ひ奉りて遺りなく見巡る程。句など言ふべき所も多かりけれど、事に紛れて皆洩しつ、道を守りの神に申す。

守り給へ神もお旅の道すがら

榎の島、

此神の御手にやにほふ琵琶の花

白菊が淵、

十月やげに白菊の名もむかし

龍穴、

此洞をおもへば神も冬籠

鎌倉にて、

鎌倉の鎌の名さびて枯野かな

梶原が矢筈も冬の案山子哉

何某の寺にて重衡の盃を見る、

盃に銚子もそえず寒さ哉

549
293

盛久が首の座、

盛久が命や濱のかへり花

鶴ヶ岡八幡、

御供して鶴も留守なり神の松

東關紀行＝源親行

此の宿をもたちて、鎌倉に着く。日の夕つがた、雨俄に降りて、みかさも取あへぬ程なり。急ぐ心にのみすゝめられて、大磯江島唐土が原など聞ゆる所々をも、見とゞむるひまもなくて、打過ぎぬるこそ、いと心ならず覺ゆれ。暮れかゝる程に、下り着きぬれば、なにがしのいりとかやいふ所に、あやしの賤が庵を借りてとゞまりぬ。前は道に向ひて門なし。行人征馬簾のもとに行違ひ、後は山近くして窓に臨む。鹿の音虫の聲、垣の上にいそがはし。旅店の都に異なる、さまかはりて心すごし。かくしつゝ明し暮す程に、徒然も慰むやとて、和賀江の月島、三浦の岬などいふ浦々を行きて見れば、海上の眺望哀れを催して、來し方に久高く面白き所

々にもおとらず覺ゆ。

さびしさは過ぎこしかたの浦々もひとつ眺めの沖の釣舟

玉よする三浦が崎の波間より出でたる月のかげのさやけさ

抑鎌倉の始めを申せば、故右大將家と聞え給ふ。水の尾の御門の九世の末尊、猛き人にうけたり。去りにし治承の末に當りて、義兵を擧げて朝敵をなびかすより、恩賞頻りに隴山の跡を繼ぎて、將軍のめしを得たり。營館を此の處に占め、佛神を其の砌に崇め奉るより以來、今繁昌の地となれり、中にも鶴岡の若宮は、松柏の綠いよ〳〵しげく、蘋蘩の供かぐることなし、陪從を定めて四季の御神樂怠らず、職掌に仰せて、八月の放生會を行はる、崇神のいつくしみ、本社にかはらずと聞ゆ。二階堂は、殊にすぐれたる寺なり。鳳の甍日に輝き、鳧の鐘霜に響き、樓臺の莊嚴より始めて、林池のありどに至るまで、殊に心とまりて見ゆ。大御堂と聞ゆるは、石巖のきびしさをきりて、道場のあらたなるを開きしより、禪僧庵を並ぶ。月おのづから祇宗の觀をとぶ

549
293

らひ、行法座をかさぬ。風長へに金磬の響をさそふ。然のみならず、代々の將軍以下造り添へられたる、松の社蓬の寺まち〳〵にこれ多し、其の外由比の浦といふ所に、阿彌陀佛の大佛を造り奉る由語る人あり。やがて誘ひて參りたれば、尊くありがたし。事の起りを尋ぬるに、本は遠江の國定光上人といふものあり。過ぎにし延應の頃より、關東の貴き賤しきを勸めて、佛像を造り堂舍を立てたり。其の功既に三が二に及ぶ。烏瑟高くあらはれて、半天の雲に入り、白毫新にみがきて、滿月の光をかゞやかす。佛は則ち兩三年の功速に成り堂は又十二樓の構へ望むに高し。彼の東大寺の本尊は、聖武天皇の製作、金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にも、類なき佛像とこそ聞ゆれ。此の阿彌陀は、八丈の御長なれば、彼の大佛の半よりもすゝめり。金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりては、此も不思議と謂ふべし。佛法東漸の砌に當りて、權化力を加ふるかとありがたく覺ゆ。かやうの事どもを見聞くにも、心とまらずしもはなけれども、文にも暗く武にも缺けて、遂に住みはつべきよすがもなき、數ならぬ

身なれば、日を經るまゝには、唯都のみぞ戀しき。歸るべき程と思ひしも、空しく過ぎ行きて、秋より冬にもなりぬ。蘇武が漢を別れし、十九年の旅の愁、李陵が胡に入りし、三千里の道の思ひ、身にしらるゝ心地す。聞きなれし虫の音もやゝ弱りはて、松吹く峰の嵐のみぞ、いとゞ烈しくなりまさる。懷古の心に催されて、つく〳〵と都の方を眺めやる折しも、一行の雁かね、空に消えゆくも哀れなり。

歸るべき春をたのむの雁かねもなきてや旅の空に出でにし

かゝる程に、神無月の二十日あまりの頃、はからざるにとみの事ありて、都へ歸るべきになりぬ。其の心の中、みづぐきのあとにも書きながし難し。錦を衣る境は、固より望む所にあらねども、故郷に歸るよろこびは、朱買臣に相似たる心地す。

故里に歸る山路の木がらしに思はぬほかの錦をやきん

十月二十三日の曉、既に鎌倉を立ちて都へ赴くに、宿の障子に書きつく、

なれぬれば都をいそぐ今朝なれどさすが名殘の惜き夜かな

549
293

江島も程なし、天女住みたまふ勝地、殊更あすは亥の日なれば、結縁すべしとて、駒なべていそぐに、潮時さへ程よく、詣でたり。胎金兩部の石窟、月見すまじく、社壇近く荒浪打寄せて、岩の雫糸竹をこらす音なひ、長夜の眠も覺めぬべし。御縁起の趣、天神天降り、地神現はれて、造り出せる島とぞ。社僧松火ともし、しるべして見せられたるに、天上の岩つみ上げ、細工(ほそたくみ)のさし合せたる樣なり。身の毛もよだつ心ちすれば、大方ふし拜みて立かへり侍り。三切殿發句一法樂せよかしと、頻の事にて

たが筆もえやはゑしまがうす霞

此島のこゆるぎの渡りよりみし俤なるべし。とかく休らふ程に、汐滿くれば、渡し舟坊より言付られておりたり。片瀨川腰越過ぎゆけば、ゆゐの濱、みなせ河も見えわたる程なり。愛阿彌鎌倉より迎に來れり。しるべして昔の跡など問聞くほど、暮方に成てつきたり。旅宿は太守より後藤方へ仰せ付られ、清閑をそへられ、幻庵より多田など案内者とて加へられたれば、何方も覺束なからず、舊跡の旅ね其感有り。

けふは三月一日、早朝先づ鶴が岡八幡宮參詣。松の木のまの櫻盛りにて、石清水臨時の祭、舞人のかざしに思ひまがへられたり。近年御遷宮。朱の玉垣より始め、見るめも耀やく春の光、纔に昔おぼえたり。まず金澤一見すべしとて急ぎ侍れば、後藤案内致して打出るほど、目に近き谷々、右大將家の御跡、山がつも心あるにや、畑にもなさず芝しげらせ、はなち飼ふ駒所え顔なり。する墨池月ひやされし流れ、さび居て影もみえず。こゝ彼所過がてにする程に、暮ぬべしといへば急ぎつきたり。遙なる干潟、山深くいりぬる磯、みるめも及ばず。金岡筆投捨てたるとぞ。うへなる山にあり。稱名寺に到りてみれば、青葉事問ふべき人だになし。暫く有て、一室とやらんいふ老僧出で、爲相卿詠歌物語りして、紅葉も老木に成て植かへられし庭の跡など敎へられ、我坊の花けふを待ちいでたるやうなればとて、心有げにさかづき出されて、此花をばいかゞなどあれば、

549
293

けふぞ思ふみぬ世の秋の色までもこの一本の花の匂ひに

など申したれば、又側より發句一つせよかし、此老僧興行の心ざしあるべけれど、このほどの見苦しさ、憚りなきにしもあらねばなど、わりなきやうにて、

秋もいざ青葉に匂ふ花の露

花の露懸りたる青葉は、紅にも染めましたるやうに申し侍り。さらば暮はてぬ程にとて打はへ、鎌倉へくれば、妙法寺住持樽など携へられ、迎にとて來られしかば、又ゑひを重ねて、暮すぎたるほど、旅宿に着きたり。蔭山藤太郎來りて、一座の望のよし内議申したり。ことに一向若年の執心もさり難きことにて、例の發句

ことゝとはゞ花やしら雲代々の春

三代將軍九代の春も、はなはかくこそは、圓覺寺の木末盛りにみえたる會席なれば也。連歌以前建長寺大覺禪師の御影、拜見の事申し遣はしたり。殊に小田原より祐藏主方へ仰せられたれば、寺中馬、宿たちへ、昨日より披露ありければ、御影堂鑑のあづかり呼びて、老僧四五人出仕せられ、燈明かゝげ燒香し、三禮參らせ、みづしの符を取るほど、何ごとかあらんと覺えたるに、鏡の面曇りたるに、十一面の尊容定かに拜ませられたり。殊勝にも有難くも奇特にも、涙落つるばかり也。御手には團扇を持ち給へりとみたる人も有り、老眼さやかならず。又拂子を持たせ給へる時もあり。夏冬にかはれりと云々。鏡記に委しく見えたる由あれど、會席より使度々なれば、懇望に及ばず。此開山光かくれ給ひなむとする時、最明寺殿歎きおはしけるを、慰め參らせられて、我姿をば此鏡にとむべし。形見と御覽じて、佛法興隆の守護とならせ給へなど有とや。餘りに有難くおぼえて、翌日祐藏主方へ申し侍りし。

照す世の面かげとめて身を分るちかひくもらぬます鏡かな

まことに正身の觀音とておはしましけん事、まのあたりに思ひしられたり。藏主より、

當臺明鏡淨無ㇾ雲、照破三千世界群、得ニ此佳篇一猶增ㇾ色、分身百億爲有ㇾ分、

雲心拜和

549
293

今日は桃花宴、庭鳥よもぎの餅をみるにも、都思ひ出られたり。かな川まで道のほども遠ければ、早くより思ひ立つに、雨雲有りとて、蔭山逗留すべきよし、樣々の事ながら、むりに立つべしとて、馬どもの事申したり。庭の櫻、雲と散りきて、殘り多さをそふるさまなれば、亭主の方へ、

思ひおく心もしらで別れ路の露よりもろく散る櫻かな

鎌倉より彼是送りにとて駒なべ、先になり跡にむれつゝ、さらばやなど行別れたり。

東遊記—橘南谿

鎌倉は、東武通行の人の見る所にして、珍らしからねど、又したしく其地に臨めば、昔の俤、山川別しては神社佛閣に殘りて、懷古の情にたへず、先鶴岡八幡宮に詣ず、其壯麗男山につぐべし、佛寺には建長寺など最も大刹なり、鶴岡南面のきざはしを登れば、大なるいてうの木あり、昔此宮の別當公曉、將軍實朝公を弑したる所なりと云、八幡宮の正面通一の鳥居二の鳥居三の鳥居あり、すべて鎌倉は皆山にて、地面甚だ狹し、僅の谷の間々に、屋敷屋敷を構へ、住居せし事と見ゆ、

此故に比企が谷、大藏がやつ、扇がやつなどと谷々の名甚多し、賴朝卿の屋敷跡は、八幡宮の東の方にあり、此地少し平坦なれど、四三丁四五丁に過ず、其外の谷々のせまきことおして知るべし、屋敷跡の少し上の方に賴朝卿の塚あり、今の薩摩侯の寄附の大なる石の手水鉢あり、其岡の東の上の方に薩摩侯の先祖の墓所もあり、此あたり薩州より寄附の物品々あり、猶近きうち、造營も有べきよしなりとて、鎌倉の人々悅び居れり、八幡宮の東の方に滑川とて細き流れあり、青砥左衞門錢を落せし川なりといふ、其時の事は郊外のやうに聞えしが、其頃は今の世の如く、町家などは無りしにや、義經の腰越も鎌倉を去る事、京と大津計も有べしと、兼ては思ひ居しが、僅に一里計にも足らず、今の京江戸の如くならば町の眞中なるべし。昔は何事も微々なる事にて、鎌倉といへども、今の四五萬石の大名の城下程にも無き事と思はる、凡鎌倉は高山も無く大河も無く、要害の地ともいふべからず、只小き山數里四方に連りて波濤のごとく、其間の谷々も甚せまく、打晴たる平地は絶てなし、但源氏にはゆえある地

549
293

なれば、賴朝の都し給ひしにや、伊豫守賴義鎭守府將軍に任じ、安信の貞任征伐の爲に東國下向の時、石清水八幡宮を此地に勸請し給ふ、其後又相模守に任じ鎌倉に下向ありて、此所にて義家出生し給ふとかや、かく先祖由來のある地ゆえなるべし、鎌倉と名付し初は、昔大織冠鎌足公鹿島參詣の時、此地の由井の濱に宿し給ひける夜、靈夢によりて、秘藏し給ひし鎌を、當所大藏山の松岡に埋め給ふ、此ゆえに鎌倉郡といふ、又大藏山を鎌倉山とも名付し也。其外神社佛閣甚多く、古跡舊蹤種々の名ある所ひしと並べり、あげしるすにいとまあらず、余も二三日も四五日も逗留して所々を廻り、寺社の舊記などをも一見せば、面白きことも多かるべきに、只戸塚より入り來りて、其日鎌倉を草々に一見し直に江島へ出ぬれば、何のいとまもなく、見殘して過ぬ、殘り多し。

『名勝研究』刊行趣旨

旅行趣味は文明の進歩に正比例して普及の趨勢にあるところの、至上の趣味であります。然るに旅行者にとつて尤も遺憾なことは、智識階級者の手引にするに足りる案内書の無いことであります。本會は此の缺陷を補ふと共に旅行趣味の普及を圖らんが爲めに組織されたものであります。

本會の事業

一、本會の會員は毎月金四十錢也の會費を納めます。

一、會員に對しては毎月一册づゝ「名勝研究」の美本を配布します。

一、本册子刊行第一の目的は教養ある旅行者に、遺憾なく旅行の趣味と實益とを享受せしめる點にあります。

一、第二の目的は今日の小、中、女學校の地理教授に趣味豐かなる參考書を提供するにあります。

一、第三の目的は啻に旅行者の指導たるばかりでなく、之を机上に繙いても、恰も現地を逍遙するの思ひあらしむる清新なる讀み物である點にあります。

一、第四の目的は、一册の册子を單獨に繙けば一個の名勝誌であり、刊行を重ねて之を縱斷すれば、系統ある風俗誌ともなり、宗教誌ともなり、山岳誌ともなり興亡誌ともなる點にあります。

以上の趣旨に御賛同下され、御入會あらんことを切に御勸誘致す次第であります。

東京市外野方町下沼袋一六二〇

日本名勝研究會

本會顧問　田山花袋
同　守武陶雨
會長　副田丘村

昭和二年四月廿五日印刷
昭和二年五月二日發行

鎌倉と江の島奥附

著者　日本名勝研究會
東京市外野方町下沼袋一六二〇
發行者　副田勉
東京市京橋區日吉町
印刷者　渡邊爲藏
東京市東橋區日吉町
印刷所　民友社
東京市外野方町下沼袋一六二〇
發行所　日本名勝研究會

549
293

549
293

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black